

60's HANABI

作・古川健

登場人物表

小林清・・・小林蚊帳社長

小林悦子・・・清の妻

小林勉・・・清の弟

越智武雄・・・ベテラン蚊帳職人

茨木実・・・隣人 清・勉のおさななじみ

松尾和夫・・・取引先藤井寝具店社員

飯田修三・・・中卒の集団就職者

高田恵一・・・刑事

村上賢・・・警官

オープニング

2017年現在、東京都内、昔ながらの古いアパートの一室。制服姿の警官、村上が入ってくる。少し室内を見回す間に、スーツ姿の刑事、高田が入ってくる。

村上 ご苦労様です。(敬礼)

高田 (返礼) 本署の高田です。

村上 村上です。

高田 鑑識は？

村上 まだです。現場(げんじょう)はそのまま維持しております。

高田 まあ、ただの自殺ならいいでしょうが……。仏は？

村上 発見が早かったので救急車で病院へ。しかし……

高田 間に合わなかった。

村上 はい。すぐに死亡が確認されたそうです。

高田 なら今頃、検死に回されてるか……

村上 はい……

高田、黙って部屋を見回す。

高田 それにしても……

村上 はい？

高田 古いアパートですね。

村上 そうですね……。築四十年ほどでしょうか？調べればすぐ分かると思いますが。

高田 それには及びません。それで？状況は？

村上 (手帳を出す) はい。よろしいですか？

高田 (同じく手帳を出す) どうぞ。

村上 仏はこの部屋に住む飯田修三、七十二歳。身元は第一発見者の大家が確認しています。

高田 珍しいですね。

村上 と言いますと？

高田 独居老人の自殺だと発見が遅れてしまうのが常です。でも救急車を呼ぶぐらいの早期発見だったんでしょ？

村上 それなんです、約束していたようです。

高田 約束？

村上 ええ、このアパート取り壊しの話があるようですが、立ち退きについて話し合うために、あらかじめ尋ねる時間を通知してあったそうです。

高田 なるほど、それなら仏は大家が来る時間を知っていて首を吊った可能性があるかと。

村上 電話で決めたそうなので、その可能性は高いかと思われます。

高田 ああ、それなら立ち退きに対する当てつけということも考えられるなあ。

村上 これだけ聞いたならそう思いますよね・・・

高田 ？

村上 私、大家に会いましたが、飯田との関係は良好だったようです。立ち退きに際しても、十分過ぎる配慮をしていたようです。隣のマンション、同じ大家の物件だそうですけど、そこに一室用意していたそうです。

高田 なるほど・・・

村上 長く住んでくれていたし、飯田さんもお年だからと気遣ってたそうです。直接聞きました。

高田 ……理想的な条件ですね。

村上 まったくです。

高田 立ち退きは自殺の動機とは無関係か・・・

村上 よろしいでしょうか？

高田 なんです？

村上 動機については知りませんが、発見が遅れて迷惑をかけないようにしたとは考えられませんか？

高田 ……

村上 見ての通り、部屋も片付いています。

高田 確かに、そうですね。覚悟の自殺というか。

村上 最近・・・と言ってももうかなり立ちますが、孤独死の悲惨な現場を見る機会が増えました。

高田 そうですね。

村上 (見回して) それと比べれば、綺麗なもんです。

高田 我々を気遣ってというわけですか？

村上 まあ、考えすぎかもしれないですけど。

高田 ……それにしたって、七十過ぎて、わざわざ自分から命を絶つこともないのになあ。

村上 同感です。

高田 事件性がないなら、我々が動機をうんぬんする必要はない。でも、考えちゃいますよねえ。

村上 あの、それについてなんですけど、遺書らしきものはあります。

高田 そうですか・・・らしきもの？

村上 これなんですけど・・・(ノートを取り出し渡す)

高田 (受け取る) ノートですね。表紙には何も書いてない。

村上 中にびっしり何か書かれてるんです。

高田 (パラパラめくる) 本当だ。読みました？

村上 いえ、本署にお任せしようと思ひまして。

高田 そうですか・・・(ノートをめくって読みだす) ああ、かなり達筆だなあ。このノトを見つけてくれた方、おそらく大家さんか警察の方かと思う。ご面倒をお掛けして申し訳ない。特に世話になった大家さんには申し訳なく思う。幸い取り壊しも迫つてゐる故、この古いアパートと共に、この愚かな年寄りの痕跡も消え去ってくればと願うばかりである。(顔を上げる)

村上・・・遺書そのものですね。

高田 ノート一冊分の遺書。

村上 何が書いてあるんでしょうね？

高田 (ノートを渡し) 読んでみますか？

村上 え？

高田 私は聞いています。お願いします。

村上 私ですか？

高田 疲れたら代わりますよ。さあ。

村上 分かりましたよ。(表紙をめくって)・・・どうしてこのように身を処さねばならぬのか、それは私自身はつきりと言葉に残すことは難しい。馬齢を重ね、なお己のこと一つ分からねぬこの愚かしさがもどかしくもある。残せぬ以上、黙つて去るのがふさわしからうとも思う。しかしながら、私は以下に、近頃私の心から離れぬあの頃のことを書いて残す。まことに未練がましいことではあるが、何故かそうしないではおられない衝動がある。これも愚かな年寄りのすることとご容赦いただきたいものだ。

セリフ中に転換。

第一幕 昭和三十五年

年老いた修三の声 あの時。そうあの頃の話、私が集団就職で、会津の片田舎から東京に出てきた昭和三十五年から始めたい。私が就職したのは小林蚊帳という蚊帳を作っている小さな小さな町工場であった。その下町にあつた懐かしい工場とそこにいた懐かしい人々。半世紀以上経た今でも、色鮮やかに思い出すことができる。私は確かにあの時、あの人々と共に生きていたのだ。

小林蚊帳、工場内のちよつとした休憩所。工場主の弟小林勉と職人越智武雄が昼食を取つた直後。勉は新聞を読み、越智は弁当箱を片付けている。

勉 (新聞を読みながら) セドリックが発売開始か・・・

越智 また車の話ですか？

勉 そう、日産のセドリック。欲しいもんだなあ・・・

越智 俺たちみたいなもんにゃ高嶺の花でしょ？

勉 まあなあ、トヨタのクラウンと同じ高級車だよ。

越智 そんなら庶民にゃ関係ねえ話ですよ。

勉 そうだよなあ・・・

越智 それに勉さん。

勉 ん？

越智 まず免許取らねえと。

勉 (笑う) そりやそうだ、武さんの言う通り。まあでもこれからは車の時代だからよ。

越智 セドリックはともかくとして免許くらいは取っとかねえとなあ。

勉 あんたあまだ若い。いいんじやねえんですか。

越智 うん、まあ先立つもの問題だよ。

工場主の妻、悦子登場。繋がっている自宅部分からお茶を持ってくる。

悦子 はい、お茶どうぞ。

越智 ありがとうございます。

勉 義姉さん、弁当御馳走さんでした。

悦子 お粗末さんでした。じゃあ片しちゃうよ。

勉 お願います。

越智 悦子さん。

悦子 なんです？

越智 清さんはどれくらいで戻りますかね？

悦子 そうねえ、もうすぐ戻るとは思うんだけど。昼は戻って食べるって言ってたから。

越智 そうですかい。

悦子 どうかしました？

越智 いや、清さんがいなかった分ちよつと仕事が遅れてるんでね。

勉 気にかしたことあねえよ。

悦子 そうよ。うちの人、新しい子迎えに行ってるんだから、仕方ないよ。

越智 まあそうなんですけど、ちよつと気持ち悪くって。

悦子 真面目ねえ武さんは。勉さんも見習いなさいよ。

勉 はいはい・・・それにしてもどんな奴が来るのかね？

悦子 そりや私にだって分かんないよ。

勉 まあうちに金の卵が来るなんて、兄貴も思い切ったことするよなあ。

悦子 でもさ、若いうちに仕込んだ方がいい職人さんになってくれるんじゃない。あの人は

そう言ってたよ。

越智 そりや間違いのねえこった。清さんの言う通りですよ。俺だってこの先代に世話になったのは十三の頃でした。

勉 武さんのころとは時代が違うよ。どこの子って言ってたけ？

悦子 会津。福島県の子だってさ。

勉 中学出るなり福島くん dari から東京まで出てくるんだ。大変なこったろう。

悦子 そりやそうでしょうよ。可愛がってやってね、二人とも。

勉 そりやまあそうしますとも。

越智 職人の技は習うものじゃなくて盗むものですからね。その辺、分かっつてりやなんも冷たく当たったりはしませんよ。

悦子 武さん・・・

勉 大丈夫大丈夫。こんなこと言ってるけど、武さん優しいから。ねえ？

越智 そんなことないですよ。

勉 兄貴や俺に仕込んだ時は武さんが仏様に見えたもんさ。その分、親父は鬼みてえに怖かったけど。

越智 そりや清さんとあんたは先代のお子さんだったからですよ。(出ていこうとする)

勉 武さん？

越智 仕事戻ります。遅れてる分、やんねえと。

勉 まだいいよ。もうすぐ兄貴も戻ってくるから。

越智 いや、なんか気持ち悪いんで。

越智、退場。

勉 真面目だねえ。

悦子 ありがたいこっちゃないか。武さんはうちの宝だよ。

勉 はいはい。

悦子 ほら、お茶片すよ。

勉 (湯呑を飲み干す)

悦子 (片付けながら) じゃあ私、家の方で洗濯の残りやってるから。新しい子が来たら声掛けてね。

勉 分かりましたよ。

悦子 ちゃんと笑いかけてやってね。

勉 え？

悦子 東京に出てきたばかりで心細いだろうから。そういう時に笑いかけると嬉しいもんだよ。

勉 ああ、なんか説得力あるねえ。

悦子 私が見合いで東京に出てきた時さ、清さん、目が合うなり笑いかけてくれたんだよ。

勉 ええ！あの兄貴が。

悦子 そうだよ。意外でしょ？

勉 なあ、急にのろけないでくれよ。家族のそういうの別に聞きたくないから。

悦子 あらあら、独り身の耳には刺激が強かったかしらね。

勉 ほっといてくれ。

悦子 じゃあ、行くから、あとよろしくね。

勉 はいはい。ごちそうさまでした。

悦子、湯呑弁当箱などを持って退場。勉は新聞に戻る。

清の声 ただいまー。

勉 ！

清の声 さ、こっちだ。来てくれ。

工場主小林清、少年の飯田修三、登場。修三は入り口付近に立ちすくむ。

勉 お帰り！お疲れさん。

清 ああ。ほらこっち来てくれ。

勉 この子か。

清 そうだよ。こいつは俺の弟で勉だ。勉、この子が集団就職で上京してきた飯田修三君だ。

勉 よろしく。

修三 (へこつと頭を下げる)

清 武さんは？

勉 昼休み早めに切り上げて働いてるよ。

清 なんで？

勉 兄貴がいなかった分仕事が遅れて気持ち悪いって。

清 真面目だなあ。

勉 義姉さんは家の方で洗濯するってさ。

清 じゃあ、二人とも呼んで来いよ。

勉 ハイハイ・・・

勉、退場。

清 今みんな紹介すつから、ちよつと待っててくれ。

修三 ……(返事代わりに頭を下げる)

清 つつても俺と弟と親父の代からの職人が一人。あ、あと女房が経理やら事務やらは手
伝ってくれてる。たった四人のちっちゃな工場だ。

修三 ……(頷く)

清 ところでおめえ、夜行で寝られたか？

修三 ……

清 どうなんだい？

修三 (聞き取れない会津弁で)寝られませんでした。夜汽車なんか初めて乗ったんで、音
が気になってしまつて。

清 あ…あ、あれだな。悪い、もうちよつとゆっくりしゃべってくんねえか。

修三 (聞き取れるくらいの訛で)あ、ごめんなさい。

清 謝ることはねえよ。

修三 あんまり寝られませんでした。

清 そうか。そんなら昼めし食ったら昼寝しろ。

修三 え？でも…

清 今日はいいいよ。疲れてんだろ？明日からちゃんと働いてもらうからよお。

修三 ありがとうございます。社長。

越智、登場。

越智 お帰んなさい。

清 ああ、戻りました。職人の越智武雄さんだ。

修三 よろしくお願いします。

清 こっちは飯田修三君。目かけてやってください。

越智 分かりました。よろしくな。

修三 はい。

勉、登場。

清 悦子はどうした？

勉 今来るよ。

清 ったく、何やってんだよ。

勉 だから洗濯だって。

清 うるせえ。

悦子、登場。

清 遅えぞ。

悦子 はいはい、すいませんね。お帰んなさい。

清 これが女房の悦子。

悦子 初めまして。よく遠くから来てくれたね。

修三 (頭を下げる)

清 飯田修三君だ。

修三 よろしくお願ひします。

清 悦子、飯食わせて寝かせてやってくれ。こいつ汽車であんまり寝てねえみてえなんだ。

悦子 そりや可愛そうに。って、あんたはお昼は？

清 ああ、そうか忘れてた。そんじゃあ後で握り飯でも持ってきてくれ。

悦子 あいよ、ちよっと待っててね。

清 そんじゃあ、俺らは仕事に戻るから。後は頼んだぜ。

悦子 はいはい、分かりました。

清 よっしや、今日の分さつさと片付けちまおう。武さん、午前中抜けてすいませんでした。

越智 いや、俺は別に。

清 行くぞ、勉。

勉 はいはいっと。じゃ修ちゃん、晩飯の時にでも。

修三 は、はい。

清、勉、越智、退場。

悦子 ねえ。

修三 はい。

悦子 私も修ちゃんって呼んでいい？

修三 ……あ、はい。

悦子 よろしくね、修ちゃん。

修三 おかみさん。こちらこそよろしくお願ひします。

悦子 (少しこらえるが笑う)

修三 え？あの？

悦子 ごめんなさい。おかみさんってなんかくすぐったくって。

修三 ……はあ。

悦子 悦子さんでいいよ。

修三 分かりました。

悦子 ちよっと座って修ちゃん。(居住まいを直す)

修三 はい。(正座)
悦子 膝崩していいよ。
修三 大丈夫です。
悦子 私もほら、この足だから正座できないの。
修三 お怪我ですか？
悦子 ううん。空襲でね。
修三 ……すいません。
悦子 別にいいのよ。気にしないで。
修三 はい。
悦子 この小林蚊帳は三代続く蚊帳工場なの。もともとはうちの人のお祖父さんが明治の
終わり頃に始めた商売なんですって。先代にあたるお義父様とお義母様、私にとつて
はお舅さんとお姑さんが早くに亡くなってしまったから、今はうちの人が継いでま
す。
修三 それはここに来る途中に社長から聞きました。
悦子 そう。まあ見ての通り、ちっぽけな工場。社長とかおかみさんとかじゃなくて、ここ
のみんなは家族みたいなものよ。
修三 はい。
悦子 あなたは今日からこのうちの人です。つまり私達は家族みたいなもの。
修三 家族……ですか？
悦子 もちろん、御実家には本当のお父様とお母様が修ちゃんのことを心配してらっしゃ
るのでしょけれど、だからこそ、私達もあなたのことを家族と思つてご両親からお預
かりする覚悟です。
修三 ……
悦子 気兼ねはいりません。困ったことがあつたら、なんでも話してちょうだい。
修三 ……ありがとうございます。
悦子 (笑つて) つて急に言われても困っちゃうよね？まあ、一つ屋根の下で同じ釜の飯を
食べるんだから、おいおい仲良くなりましょう。(立ち上がつて) さあ、こっちおい
で。お腹空いたでしょう？
修三 はい。(立ち上がる)
悦子 (行こうとして立ち止まる) あ、そうだ。
修三 ?
悦子 修ちゃん、あんた好き嫌いある？
修三 ありません。なんでも食べます。
悦子 それじゃあ今夜はちよつと贅沢してすき焼きにでもしようかしらね。
修三 すき焼きですか？
悦子 まあ、うちのは牛じゃなくて鶏だけどね。

修三 それでも僕にとつては御馳走です。
悦子 なら良かった。じゃあおいで。

悦子、修三、退場。転換。数日後、朝。越智、登場。帽子や上着を脱いで仕事の為に身支度を始める。そこに箒とちり取りを持った修三、登場。

修三 おはようございます。

越智 おはよう。早いじゃねえか。

修三 はい。もう掃除は済ませました。

越智 ああ、ご苦労さん。偉いじゃねえか。

修三 昨日怒られましたから、念入りにやりました。

越智 いい心がけだよ。昨日は怒鳴って悪かったな。

修三 いいんです、これからも色々教えてください。あ、お茶でも淹れましょうか？

越智 いや、俺のことはかまわねえでくれ。

修三 はい。すみません。

越智 謝んな。こっちこそすまねえな、気を遣ってくれたのによ。

修三 とんでもない、すみません。

越智 ……

修三、箒とちり取りを片付け、隅に置いてある本を読みだす。越智、少し気になって様子を覗う。

越智 おい。

修三 はい。

越智 おめえ、時間があると本読んでもみてえだな。

修三 ああ、そうですね。

越智 何を読んでもんだ？

修三 これは参考書です。

越智 参考書ってのはなんだ？

修三 えっと、勉強の参考書です。

越智 勉強？

修三 はい。これは生物です。でも他の科目も読みます。

越智 なんだってまた？

修三 僕、好きだったんです、学校の勉強。

この辺りで清、勉、登場。入り口付近で修三の話を聞いている。

修三 中学校の先生が言ってたんです。学校行かなくなつたつて勉強は続けられる。勉強つてのは一生続けるもんなんだ。

越智 そうか。

修三 僕のクラスじゃ半分以上が卒業して働きに出ます。それでそんなこと言ったんだと思ひます。でも僕は先生の言う通りだと思ひました。だからせめて空いてる時間は勉強を続けてます。

越智 ふーん、えれえもんだな。

清 (中に入つていく) 武さん、おはようございます。

勉 おはよう。

越智 あ、おはようございます。

清 修三、掃除ご苦労さん。

修三 はい。

越智 それじゃあ、始めます。(修三に) おい、行くぞ。

修三 はい。よろしくお願ひします。

越智、修三、退場。

勉 (座り込む) 修ちゃんのことには武さんに任せておけば大丈夫だな。

清 ああ、そうだな。

勉 なんだかんだ言つて面倒見いいからなあ武さん。

清 いいからおめえも働けよ。

勉 まだ早いよ。武さんは自分の好きで早く始めてんだから。

清 まあ、そうだけだよ。

茨木の声 おはよー。

勉 お、実ちゃんだ。

小林家の隣人茨木実、登場。話しながら上がり込んでくる。

茨木 おう、清に勉。

勉 おはよう。

清 なんだよ?こんな朝っぱらから。

茨木 清さあ、久しぶりに一指しどうよ?(将棋の手ぶり)

清 馬鹿か、そんな暇あるわけねえだろう。

茨木 分かつてるよ。今夜どうかつて言つてんの。

清 そういうことかよ。まあ、今夜なら別にいいけどよ。

茨木 お、じゃあ決まりだな。じゃあ仕事終わったら寄らせてもらうよ。
清 分かったよ。

茨木 勉、おめえも付き合えよ。

勉 遠慮しとくは。二人とは格が違いすぎるわ。あ、麻雀なら乗るぜ。

茨木 ああ、それも悪くねえけどなあ。

清 駄目だ。一晩がかりになっちまう。

勉 昔は率先して徹マンしてたのになあ。

茨木 まあ、所帯持ったらそうもいかないんだよ。

清 うるせえよ。おめえはとつと稼ぎに行けや。

茨木 分かってるくせに、俺紙芝居屋だぞ。こんな時間に出ても稼ぎにやなんねえよ。

清 だからって人の邪魔すんな。

茨木 ところでさ、武さんと一緒にいるのが、例の金の卵かい？

清 あれ、おめえ初めてだったか？

茨木 ああ、そうだよ。

勉 修三つって、会津から出てきたんだ。良い子だぜ。

清 あとで紹介するから、仲良くしてやってくれや。

茨木 おうよ。ここに住み込んでるならお隣さんだからな。

清 頼むぜ。

松尾の声 おはようございます。清さん、いらっしやいますかー？

清 あ、松尾さん。こっちですー。

取引先の寝具店の社員松尾和夫、登場。

松尾 あ、おはようございます。

清 おはようございます。

勉 どうしたんですか？こんな早くに。

松尾 ちよつと特注の仕事が入ったんでそれを直に頼もうと思って。お、茨木さん、おはようございます。

茨木 ああ、結構久しぶりですね。いつもこいつらが世話になってます。

清 うるせえ、おめえの言うセリフじゃねえよ。

茨木 冗談だよ。

清 あ、松尾さん、ちようど良かった。ちよつと待っててください。

松尾 え？

清 (出ていきながら) 修三ー、ちよつと来てくれ。

清、退場。

松尾 どうしたの？

勉 いや、新しい子が入ったんで、ちょっと紹介を。

松尾 ああ、集団就職の。

茨木 ピカピカの金の卵ってやつですよ。

清、修三を連れて登場。

清 松尾さん、こいつが集団就職でうちに来てくれた新人です。ほら。

修三 飯田修三です。よろしくお願いします。

清 こちらは藤井寝具店の蚊帳担当の松尾さん。うちの蚊帳は松尾さんここに一手に卸してもらってんだ。親父の代からの大事な取引先様だ。

松尾 ちよくちよくここには顔出すから、よろしくね、飯田君。

修三 はい。

松尾 小林蚊帳さんの蚊帳は品質が良くて、お客様の評判もいい。君もしっかり腕を磨いて、いい職人になるんだよ。そしたらうちにはちゃんと君の作った物に良い値を付けて売ってあげるから。

修三 ありがとうございます！

清 それで急ぎの特注ってどんなんですか？

松尾 (懐から紙を出して清に渡す) ああ、物自体は普通で良いんだけど、ちょっとでかいのを一枚もので作って欲しいんだ。

清 (紙を見て) なるほど、一週間くらいもらえますか？

松尾 できれば3、4日でやって欲しいんだけど。

勉 それはちよつときついですねえ。

清 馬鹿、やりやあできる。(紙を勉に渡して) ちよつと武さんと相談してこい。急いだらどれくらいでできるか聞いてくれ。

勉 分かったよ。

松尾 勉さん、悪いね。

勉 いえいえ、お世話になってますから。

勉、退場。

清 修三、おめえも戻っていいぞ。

修三 はい。(松尾に) 失礼します。

茨木 清、紹介してくれよ。

清 おめえまだいたのかよ。

茨木 (気にせず) 俺はお隣の茨木ってんだ。こいつらとは幼なじみだ。

修三 飯田です、よろしくお願いします。

茨木 会津でしょ？訛ってるねえ。

修三 ……

松尾 茨木さん、ちょっと。

清 そうい言う方すんなよ、がさつな野郎だなあ。

茨木 あ！ごめん、そういうつもりじゃねえんだ。うちの女房も東北だからつい嬉しくなっちゃったんだよ。

清 悪く思わねえでくれよ。こいつも悪気があるわけじゃねえんだ。

修三 はい、大丈夫です。

清 行っていいぞ。

修三 失礼します。

修三、退場。

清 実…

茨木 ホントごめんって。

松尾 賢そうな子じゃないですか。拾い物かもしれませんね。

茨木 良い子が来てくれたみてえだな。おめえんところにはもったいないんじゃないか？

清 ……

松尾 清さん？

清 物覚えはいいし、真面目だし、聞いた話だと学校の成績もかなり良かったらしいんですよ、あいつ。

松尾 ああ、そうなんですか。

茨木 進学できりや良かったのになあ。

清 福島の農家の三男坊で、下にも5人いるんだとよ。とても高校にややれない経済状況だったらしい。

茨木 気の毒になあ。まあ、珍しい話じゃねえか。

清 そうだけどよ。

松尾 集団就職の子が何年かのうちに仕事辞めて学生に戻ったり、水商売に流れたりするのはよく聞く話ですね。

茨木 金の卵なんて持ち上げたって、結局は会社の都合の良い安い労働力ってことだもんなあ。

松尾 小林さんとこみたいなの小っちゃいとこならともかく、大きい工場とかなら大部屋の寮暮らしで、粗末な食事で朝から晩までってのが普通ですからねえ。

清 そうなんですか？

松尾 全部が全部、会社が悪いってわけじゃないんですけどね。農村の人余りを解消するために集団就職は大いに役立ってるそうですし。

茨木 どんな条件だろうが、田舎でくすぶってるよりはましなかもなあ。

松尾 だから高校や専門学校に通いなおしてちよつとでもいい職場へ、てのがよくある。パターンなんです。

茨木 紙芝居屋にもたまにいるな。元金の卵。

松尾 私の取引先やら親戚の勤め先とかでもよく聞く話です。

茨木 おめえんとも逃げられないように気をつけるよ。蚊帳なんて古臭いもん、あんな若い子に作らすのも無理あるからな。

清 大きなお世話だ。人のこと言えた義理かよ。

茨木 違いねえ。紙芝居なんてテレビがもうちよい普及したら間違いないやっっていけなくなるわ。

松尾 蚊帳はともかく、紙芝居は確かにそうかもしれないねえ。

茨木 あと十年くらいかね、この商売も。

松尾 そんなにすぐに変わりますか？

茨木 なんだって相手はテレビ、三種の神器の筆頭だからなあ。今年からはカラー放送まで始まるってんだから、古臭い紙芝居が流行るわけはねえよな。

清 こっちは白黒だってまだ買えやしねえのにな。

茨木 まったくだ。

松尾 うちは白黒買いましたけどね。

茨木 お！さすがですねえ。

松尾 女房子供は、もうちよつと待ってカラーを買えば良かったって文句たらたらですよ。参るよなあ、こっちの苦労も知らないで。

清 (軽く笑う) そりやお気の毒に。

茨木 それにしても清よお、お互い次の身の振り方は考えておかないとなあ。

清 馬鹿野郎、おめえと一緒にすんな。こっちは三代続く蚊帳職人だぞ。

茨木 そりやおめえはそうだな、俺とは立場は違うわ。

松尾 蚊帳は今だって夏場の必需品ですよ。最近のアパートやマンションじゃ、網戸が付いてるから蚊帳はいらないらしいですけど、急に東京中が新しい建築に変わるわけじゃないですからね。

清 そう願いますよ、切実に。こっちゃんまで増やしてんですから。

茨木 4年後のオリンピックで東京がどう変わるかだよなあ。

松尾 高速道路に新幹線、どうなっちゃうんでしょうね？東京は。

清 俺たち貧乏人は精一杯食っていくしかないですよ。

松尾 確かに東京がどうなるうが、日々の暮らしに追われてる気がしますよ。
茨木 テレビ持ちがそんなこと言っちゃって。

松尾 月賦ですよ、月賦。

勉、登場。

勉 兄貴。

清 どうした？

勉 武さんがちよつと相談したいって。

清 分かった。今行くよ。

勉 松尾さんもいいですか？

松尾 もちろんですよ。できそうですか？

勉 ちよつと他の仕事と擦り合わせれば四日でできそうですよ。

松尾 ありがとうございます。

茨木 じゃあ、俺行くわ。また今夜な。首洗って待ってるよ。

清 おめえこそ、待ったなしだからな。

勉 実ちゃん、じゃあな。

茨木 おう。松尾さん、仕事中にすいませんでした。

松尾 いえいえ、楽しかったです。また。

清 こっちにも謝れや。

茨木、知らん顔で退場。

清 あの野郎・・・よつしや、行くか。

清、勉、松尾、退場。転換。一月後、夜遅く。悦子が一人で帳簿に向かっている。そこに

清、登場。

清 おい。

悦子 (振り向いて) あんた。どうしたの？

清 まだ寝ないのか？

悦子 もう寝ようと思ってたところ。

清 ちよつといいか？

悦子 何？

清、悦子の近くに座るが何も話さない。

悦子 どうしたのさ？

清 ……うん、いや、……あのさ、どうだ？それ？（帳簿を指さす）

悦子 これ？

清 おう。

悦子 代わり映えしないねえ。まあでも、みんなでおまんま頂くには十分だよ。それだけでもありがたい話だねえ。

清 まあ戦争中から戦後しばらくはひでえ生活してたからなあ。

悦子 それと比べたら、今はまだよ。

清 ……

悦子 それで？それがどうしたの？

清 あのよ、修三のことなんだけどな。

悦子 修ちゃんがどうかした？

間

悦子 ちょっとどうしたの？

清 ……俺なあ、あいつ高校に行かせてやりてえんだ。

悦子 え？

清 今すぐは無理だけど、俺たちが力貸してやれば夜間高校には行かせてやれるんじゃないかと思うんだ。

悦子 ……

清 まだうちに来て一月だけど、あいつあ真面目な子だ。それに頭もいいし、勉強も好きだし。なんか見てて可愛そうになっちまってよ。

悦子 ……

清 俺は頭の出来も良くねえから、勉強してえなんてこれっぽっちも思ったことなかったんだけどよ。勉強してえのにできねえってのも辛いことじゃねえかと思うんだ。分かるよ、その気持ち。

悦子 おめえにしてみりゃ、赤の他人に金を使うなんて……ん？なんて言った？

清 分かるよ、その気持ち。

悦子 そうか、分かってくれるか。

悦子 あんたいたいところあるじゃない。見直したよ。

清 何言ってるんだよ。

悦子 あんたがそう言うなら、私は反対しないよ。やりくりしてみせるさ。

清 何とかなりそうか？

悦子 うーん、やっぱりすぐってのは難しいね。でも一年か二年準備したら、修ちゃん一人

清 頼もしいじゃねえか。

悦子 任せといて。

清 助かるよ、すまねえ。(頭を下げる)

悦子 ちよつとやめてよ。・・・でもさ、どうしてそこまであの子に肩入れするの？

清 え？

悦子 確かにいい子だよ、修ちゃんは。でもさ、あんたがそこまで言い出すってことは、なんか考えがあるんじゃないの？

清 ・・・

悦子 私としちゃ、そっちの方が気になるねえ。

清 ・・・もし、蚊帳が売れなくなったらって考えたんだ。

悦子 え？

清 すぐにどうなるとは思わねえけど、長い目で見りゃ、蚊帳ってのはどうやら売れなくなるだろう。

悦子 そうなの？想像できないけど。

清 そのうち日本中の家が変わって、蚊帳はいらなくなる。そんな気がするんだ。

悦子 大変じゃない・・・

清 まあ、急に仕事がなくなるわけじゃねえ。将来的にってことだ。

悦子 うん。

清 この商売が安泰なら別に構いやしねえよ。早く一丁前の職人になって独り立ちしたらいいさ。なんなら子供のいない俺らの代わりにここ継いでくれたっていいんだ。

悦子 ・・・ごめんね。

清 悪い、いらんこと言ったな。

悦子 (首を振る) ううん。でもそこまで修ちゃんのこと気に入ってるんだね。

清 まあな。

悦子 それで？

清 もちろん、ずっと務めてくれるんならそれが一番なんだよ。ちゃんと面倒見てやれるしな。

修三、登場。入り口付近でこつそりと話を聞いている。

悦子 それはそうだね。でも・・・

清 そうだ。蚊帳が売れなくなったらそうはいかねえ。だから、これはよ、そうはいかなかった時の為の保険だよ。勉強させて、ちゃんと高卒って肩書を持たせてやれば、いざって時にあいつ自身の助けになる。

悦子 うん、私もそう思うよ。

清 おめえも言った通りあいつあいい子だ。だからできることなら力になってやりてえ、そう思うんだ。

悦子 立派だよ、あんた。

清 よしてくれ、中学校も出てねえしが無い職人だよ。

修三 ……(意外なことに驚いて音を立ててしまう)

清 (音が付いて) 修三…

悦子 修ちゃん、どうしたの？

修三 参考書、ここに忘れてしまつて…ごめんなさい。盗み聞きとかそういうんじゃない…

清 別に怒つてるわけじゃねえよ。聞いてたのか？

修三 (頷いて) 少しだけ。

清 そうか。まあ手間が省けたぜ。こつち来い。

悦子 ね、ちよつと座つて。

修三 はい。(二人の近くに正座する)

清 聞いた通り、俺らはお前を高校に行かせてやりたいと思つてる。夜間で働きながらつてことになつちまうが、それでもお前が勉強してえつて言うなら力を貸してやれる。どうだ？来年か再来年か、まだ何とも言えねえが、お前の好きな勉強を続けてみねえか？

間

修三 あの、ありがとうございます。お気持ちとっても嬉しいです。

清 そうか、そんなら…

修三 (遮つて) でもそこまで甘えるわけにはいきません。

悦子 何言つてるの？勉強したいんでしょう？

修三 ……悪いです。社長にご迷惑かけるわけにはいきません。僕みたいなものを雇つてただけでいるだけでもありがたいんです。それ以上を望むつもりはありません。

清 なんでだよ？

修三 水呑百姓つてご存知ですか？

清 ……知つてるよ。

悦子 自分の土地のないお百姓さんのことでしょうか？

修三 うちは大々の水呑百姓です。戦後の農地改革で少しはましになりましたけど、今でもいやになるくらい貧乏です。

清 それがどうした？

修三 父ちゃんも母ちゃんも兄弟も、ずっと貧乏しか知らないです。きつとあと何年経つても貧乏なままだと思います。朝から晩まで土まみれになつて働いて、それでも肉なんて滅多に食べられません。いつもひもじい思いをしていました。

悦子 気の毒に…つて言えるほどうちも裕福じゃないけどね。

清 まあ戦争中や戦後すぐはずいぶんひもじい思いをしたもんだ。今だつて余裕がある

わけじゃねえ。

修三 ……それでも僕の田舎と比べたら月とスッポンです。

清 おめえがそう言うならそうなんだろうな。でも、それと高校に行くってことと何の関係があるんだよ？

修三 (うつむいて黙り込む)……………

間

悦子 修ちゃん？

修三 ……父ちゃんと母ちゃんに悪くって。

清 何言ってるんだおめえは？

修三 僕だけ東京に出て、それで優しくしてくれる良いところに就職できて。その上……学校にまで行かせてもらうなんてできません。弟や妹たちは、きっと今だってひもじい思いをしてるのに……

清 馬鹿野郎！！！！

修三 ……(怯える)

悦子 あんた急にどうしたのよ？

清 修三、てめえ、なに子供みてえなこと言ってやがるんだ！

悦子 あんた、落ちついて。実際まだ子供みたいなものでしょ？

清 いいや、違うね。男が生まれ育った家を出て、曲がりなりにも一丁前になろうとしてるんだ。歳は関係ねえよ。おい、修三。

修三 ……はい。

清 おめえの家族を思う気持ちはよく分かるよ。だったらどうしたら親孝行できるか考えてみるよ。そんなつまらねえ遠慮して、せっかくの機会を潰すことが親孝行になるのかよ？

修三 ……

清 どんな形でも、えれえ人間になって、それで家族を助けてやりやいいじゃねえか。俺たちや、その手助けをしてやろうって言ってるんだよ！

修三 社長……

清 そりや、わずかばかりしか助けてやれねえよ。そんなもんじゃないよりヤマシだろう。つまんねえ遠慮して、親不孝すんなよ。

悦子 修ちゃん、この人の言う通りだよ。言ったら、私達も家族同然のつもりなんだ。甘えでもないんだよ。

清 どうなんだよ、修三。おめえ高校に行きてえのか、行きたくねえのか、どっちなんだよ？

修三 (しばらく考えるがやがて顔を上げて) 社長、僕……高校に行きたいです。もっと

もっと勉強したいです。

清 そうか、分かったよ。

修三 勉強して、偉くなって、父ちゃんと母ちゃんを貧乏から助け出したいです。

清 なら手伝ってやるよ。

修三 ありがとうございます！なんてお礼を言えればいいかわかりません。本当にありがとうございます！（深々と頭を下げる）

清 （立ち上がって）話は終わりだ。明日もはえからさっさと寝ろよ。

清、退場。

悦子 柄にもなく照れてるよ、あの人。

修三 悦子さん、ありがとうございます。

悦子 あんたが賢くて良い子だからさ。

修三 そんなこと・・・

悦子 （立ち上がって）さっ、私も休むから、お休み修ちゃん。

悦子、退場。修三、そのままもう一度深く頭を下げる。

年老いた修三の声 五十年あまり過ぎた今でも、自分があのような温かい人々に恵まれたことが奇跡にも思える。小林蚊帳の人々はごくごくありふれた平均的日本人であった。そしてその生活の中にはありふれた優しいさにあふれていたように思う。もちろん今とは比較にならない貧しい時代であったが、それでもやはり私は幸福であったと言うしかない。

第二幕 昭和39年

年老いた修三の声 四年後、昭和39年、東京オリンピックが開催された。後にも先にも、あれほどのお祭り騒ぎを私は知らない。本当に東京中がオリンピック一色に染まったのだ。そんなお祭り騒ぎに紛れて、日本は、日本人は大きく変わった。だがその渦中にある私達はそのことには気が付かずにいたのだ。

オリンピック開催中の10月。ある夕方。松尾と茨木が将棋を指している。そこへ修三が慌てて、登場。仕事着から学生服に着替え出す。

修三 お疲れさまです。

松尾 修三君、お疲れさま。

茨木 お、そんな急いでデートかい？

修三 学校です。

松尾 偉いなあ、修三君は。働いて学校行って、大変でしょう？

修三 蚊帳作りも勉強も好きですから。

茨木 満点の答えだな。立派なもんだ。

修三 茨木さん、油売っていいんですか？紙芝居は？

茨木 いいのいいの、オリンピックのせいで商売上がったりだから。

悦子、布に包んだ握り飯を持って、登場。

悦子 修ちゃん、時間よ。

修三 はい。

悦子 はい、お弁当。

修三 ありがとうございます。

悦子 どういたしまして。行ってらっしゃい。

修三 (鞆を持って) 行ってきます。

松尾・茨木 行ってらっしゃい。

修三、退場しようとする。清と勉、登場。修三に声をかける。

勉 行ってらっしゃい。

清 気を付けて行ってこいよー。

修三 はい。行ってきます。

修三、退場。

悦子 お疲れさま。

清 おう。

勉 実ちゃん、三宅どうだった？

茨木 え？知らねえの？

勉 兄貴がラジオも聞かせてくんねえからさ。

茨木 そりゃ可愛そうに。

松尾 金だよ、金！東京五輪日本勢初の金メダル！

勉 やったー！偉いぞ三宅！

茨木 盤石の試合展開だったぞ！

清 おめえら、普段は重量挙げなんて興味もねえのに現金なもんだなあ。

勉 それは言いつこなしたろう。

茨木 そうそう、にわかだろうが何だろうが楽しきゃそれでいいんだよ。

松尾 私も重量挙げなんてルールすら分からないですけど、やっぱり応援しちゃいますよね。

悦子 私もラジオは聞いてたよ。

勉 そういうのは教えてよ、義姉さん。

悦子 仕事の邪魔しちゃ悪いでしょ？

清 あたりめえだ。

越智、登場。

越智 三宅、金ですかい？

清 武さんまで・・・

越智 お恥ずかしい。スポーツなんて相撲くらいしか興味なかったですけど、日本でのオリンピックとなるとねえ。

勉 兄貴よ、こっちの方が多数派だぜ。同じアホなら踊らにや損ってやつだよ。

茨木 勉よお、テレビ観に行くか？

勉 え？どこに？

茨木 駅向こうのテキサスのマスターがテレビ買って今日届くんだとよ。

勉 テキサスってあのコーヒーの不味い喫茶店だろ？

茨木 (笑う) そうそう、客集める為に、何とか月賦組んで買ったんだと。

清 美味しいコーヒーを淹れるよ。

勉 行く行く、ニュースで三宅の金もやるだろう？

茨木 そりゃ、やるだろうよ。

勉 兄貴は？

清 俺はいいよ。

勉 あ、そうか。じゃあ、行ってくるわ。

清 ああ。

茨木 松尾さん、じゃあ、この続きはまた今度。

松尾 はいはい、局面覚えておきますよ。

茨木 よっしゃ、行くぞ勉。

勉 あいよ。

茨木、勉、退場。

清 　　つたく、浮かれやがって。

松尾 　まあ、気持ちには分かりますよ。戦争が終わって十九年、やっと日本は復興を果たしたんだなあって実感してるんですよ、みんな。

清 　　それは分かりますけどね。

悦子 　じゃあ、松尾さん、お茶淹れてきますね。それとも夕方ですからおビールにしますか？

松尾 　車ですから、お茶で。すみません、奥さん。

悦子 　はい。

悦子、退場。

松尾 　街中どこもかしこもオリンピックピックオリンピックです。分かつちやいましたけど、ここまでお祭り騒ぎになるとは思いもしなかったな。

清 　　景気が良いのはありがたいことですけどね。

松尾 　そうですね、景気に引つ張られて、ちよつと値の張る布団も売れてますよ。ありがたいもんです。

清 　　なるほど、そういうもんですか。

松尾 　それにね、ここ何年かで東京って世帯数が一気に増えたんですよ。

清 　　ああ、それはそうみたいです。地方というか、農村からの人口流入がうんたらってなんかで聞きましたね。

松尾 　そうそう、修三君みたいな集団就職者とかが上京して単身世帯が増えてるんです。それでそのうちの何割かはこっちで布団を買うわけですよ。

清 　　布団だけじゃなくて世帯の数だけ色々売れるわけですよ。

松尾 　そうそう、売れるから安く作ることもできる。三種の神器も安くなったでしょ？
清 　　今じゃカラーテレビ、車、クーラーが新三種の神器なんて言いますね。うちじゃどれも買えやしねえけど。白黒だってまだですからね。

松尾 　まあ、清さんは修三君の学費とか出してるわけですから・・・

清 　　いや、それがなくても怪しいもんです。なんせ、蚊帳は売れなくなりましたからね。

松尾 　・・・・・・

清 　　今日はそのお話ですよ？

松尾 　・・・・分かってましたか。

清 　　長い付き合いじゃないですか。遠慮はいりません、話してください。

間

松尾 　（居住まいを正して頭を下げる）清さん申し訳ありません。

清 松尾さん、そんなことしないでください。

松尾 とりあえず来年から小林蚊帳さんとの取引量を三割減らさせてください。

清 三割ですか・・・

松尾 私も色々力を尽くしたのですが、どうしても上が納得してくれなくて。

清 いや、まあ分かりますよ。

松尾 良かったら他の会社で蚊帳を欲しがってないか探してみます。23区外ならまだまだ需要もあるはずですから。

清 正直、助かります。こつちでも探しますけど、そういう動ける人間、営業っていうんですか？うちにはいませんから。

松尾 うちもお父さんの代から良い物仕入れさせてもらってききましたから、できる限りのことはさせてもらいます。

清 (頭を下げる) お願いします。

悦子、お茶を持って登場。

悦子 どうぞ、松尾さん。

松尾 ありがとうございます。

清 悦子、お前もちよっといてくれ。うちの懐事情はお前が一番分かってるだろう。

悦子 どうしたんですか？

清 藤井寝具さんからの注文が3割減るんだ。

悦子 3割・・・

松尾 奥さん、申し訳ありません。

清 どうだ？

悦子 すぐにはどうこうならないけど・・・

清 どのくらいもちそうだ？

悦子 一年は何とかなると思う。

清 一年か・・・

松尾 清さん、悦子さん。

清 はい。

松尾 差し出口とは思いますが・・・

清 言ってください。

松尾 やはりこういう時は人件費の削減が常套手段ではないでしょうか？

悦子 え？それって？

松尾 はい。やはり誰か一人は・・・その・・・減らす、ということですよ。

清、悦子、顔を見合わせ、黙り込む。

松尾 二人の気持ちは分かりますよ。私だって足しげくここに寄らせてもらってるから、誰の首も切れないってのは、よくよく分かってるつもりです。だから、今のは無責任な忠告だと聞き流してください。

清 いや、はっきり言ってくださいって、ありがとうございます。

松尾 (頭を下げる) 本当すいません。もっと前もってお知らせするべきでした。私も急に知らされたもので。

悦子 頭を上げてください。松尾さんが悪いわけじゃないんですから。

清 そうですよ、松尾さん。遅かれ早かれこうなるんじゃないかねえかとは思ってたんです。

松尾 はい。

清 まあこんな急にとは思ってたんですけどね。

松尾 なんだか世の中の流れが急に速くなってしまったように思います。

清 まあ、それでも生きていかなきゃいけないわけですからね。

松尾 そうですね・・・では、今日はこれで。

清 はい。

松尾 ・・・・失礼します。(立ち上がる)

清 松尾さん。

松尾 はい？

清 本当はすぐにでもつてところを、今年いっぱいにしてくれたんじゃないやありませんか？

松尾 そんなことはありませんよ。

清 だって今十月ですよ。これから一番蚊帳の売れない時期なのに。

松尾 ・・・・

清 ありがとうございます。

悦子 お気遣いありがとうございます。(丁寧に頭を下げる)

松尾 こんなことしかできず、申し訳ありません。

松尾、一礼して退場。沈黙。

悦子 あんた・・・

清 仕方ねえこった。

悦子 どうすんの？

清 俺一人で決めるわけにやいかねえよ。話し合わなきゃな。

悦子 そうねえ・・・

転換。その日の深夜。清、悦子に勉が加わる。沈黙。

勉 なるほどね、事情は分かったよ。
清 ああ。

悦子、お茶のセットを片す。

悦子 二人ともなんか飲む？

勉 俺はいいや。

清 俺もだ。

悦子 じゃあちよつと片してくるね。

悦子、退場。さらに沈黙。

勉 悪かったな、兄貴。

清 何が？

勉 今まで面倒なこと全部押し付けてきちまって。

清 馬鹿なこと言うんじゃないか。

勉 人員削減かあ。

間

勉 武さんは？

清 え？

勉 武さんなら、腕があるから何とかなるんじゃないか？

清 おめえ言っていることと悪いことがあるぞ。親父の代からどんだけ世話になったと思ってるんだ。あの人追い出したら罰が当たるぞ。
勉 分かっているよそんなこと、言ってみただけだろ。

間

勉 そうしたら修ちゃんか。

清 ・・・・

勉 気の毒だけどなあ・・・

清 そういうわけにやいかねえだろ。

勉 え？

清 俺の見通しが甘かったせいで巻き込んだんだ。あいつをほっぽり出すわけにやいかねえよ。

勉 しょうがねえよ、誰もこんなすぐに蚊帳が売れなくなると思ってたよ。
清 今から思えば、兆しはずつと前から見えてたんだ。こんだけ世間が好景気好景気って
言ってるのに、うちの売り上げは全然伸びてなかった。俺が甘かったんだ。
勉 そんなこと今言っても仕方ねえだろ。

悦子、登場。黙って座る。沈黙。

清 俺の見栄かもしれないねえが、修三を辞めさせるわけにやいかねえ。せめて高校を卒業さ
せてやんなきゃ男の一分が立たねえだろ。
勉 そんなこと言ってる場合かよ。義姉さんどう思う？
悦子 この人がこう言うんだから、そうしてあげたいね。それに修ちゃんには情がわいちま
つてるからねえ。
勉 それに関しちゃ、俺も同じだよ。まったく揃いも揃ってお人よしだよなあ。
悦子 こずるいよりはずつといいと思うよ。
勉 (苦笑) まあな・・・

間

勉 そうなると、俺ってことになるかねえ。
清 ……馬鹿言うな。
勉 武さんも修ちゃんも出せねえってなら俺が外で働くしかねえだろ？
悦子 勉さん・・・
勉 兄貴、それか今のうちに工場畳んじまうってのもあるんじゃないか？
清 ……何言ってるんだ？
勉 いや、兄貴の気持ちも分かるよ。俺だって祖父ちゃんの代からの工場を潰すのはいい
気はしねえ。でもさ、時代が変わったんだよ。ただの流行すたりじゃねえよ。日本人
の暮らしが変わっちゃまったんだ。もう二度と、蚊帳の売れる時代は来ねえ。
清 それは俺にも分かっている。だけど、そう簡単に切り捨てるわけにやいかねえだろう。
勉 俺たちや蚊帳作って売ることしかできねえんだ。
兄貴はよくやってきたよ。ここで畳んでも、親父も祖父ちゃんも兄貴を怒ったりはし
ねえよ。

間

清 だからっていきなり無責任に放り出すわけにやいかねえ。武さんと修三がいるんだ。
勉 まあ、兄貴ならそう言うと思うってたよ。

清 あたりまえだ。
勉 だから俺しかいねえだろ？なんか家のことずっと兄貴に任せっきりで、頼りねえ弟で悪い気もするけどな。
清 ……そんなことねえ。
勉 兄貴は兄貴のやり方でここ守ってくれよ。俺がやめることで兄貴の力になれるんなら俺は喜んでよそに行くよ。

間

清 (頭を下げる) すまねえ、勉。そうしてくれるか？
悦子 あんた…
勉 よしてくれよ。無理を聞くのが家族じゃねえか。
清 ああ、俺はここでやれるだけやってみる。
勉 武さんと修ちゃんに病まないように、うまくやらねえとな。
悦子 どうするつもり？
勉 この話は三人だけの秘密ってことで頼むわ。二人には俺が我がままで辞めるって思ってもらわねえとな。
清 そうだな。
悦子 ちょっと考えたら分かっちゃうと思うけどね。あの二人だって馬鹿じゃないんだから。
勉 そりゃそうだけどさ、まあ建前は大事だよ。
清 貧乏くじひかせちまったな。
勉 ……そうでもねえよ。俺はさつきも言った通り、ここを畳むのが一番良いと思ってる。この好景気だぜ、働き口ならいくらでもあるんだ。
清 そうかもな。
勉 だから、まあ俺のことは気にしねえで頑張ってくれよ。
清 分かったよ。
勉 (改まって) 義姉さんも、兄貴と工場のことよろしくお願いします。
悦子 はい、精一杯努めます。
勉 (明るく) じゃ、まあ明日から職探したな。あ、でもオリンピックが終わってからにしようかな？どうよ？
清 別に構わねえよ。好きにしる。
勉 はいはい、そんじゃそうさせてもらいますよ。
悦子 頑張っつね、勉さん。
勉 何とかなるよ、このご時勢だからさ。

転換。一月後、オリンピックも終わった時期。仕事のあと。修三が慌てて入ってきて、学校に行く準備をしている。そこに清、登場。

清 どうした？まだそんな慌てる時間でもねえだろう？

修三 あ、いや、ちょっと・・・

清 どうした？

修三 授業の前に、研究会の集まりがあるんです。

清 研究会？すげえな勉強する前に更に勉強するのか。

修三 あ、でも授業じゃ教えてくれないことというか・・・

清 何を研究してるんだ？

修三 社研・・・あ、社会科学研究会です。

清 社会科学？

修三 世界情勢のこととか、政治のこととかを勉強しています。

清 ・・・・言えばおめえ、最近帰日も遅いし、休みも出かけることが多くなったな。

その社研とやらの集まりか？

修三 ・・・・はい。

清 まさかとは思うけど、今はやりの暴力学生みてえな真似はしてねえだろうな？

修三 暴力学生？

清 今、あちこちの大学で流行ってるだろ？全なんとかとか、社会なんとかとか、ああいうのだよ。

修三 僕等ああいう人達みたいなゲバルトなんてしません。読書会とか学習会とかしてるだけです。

清 ゲバル？・・・よく分かんねえがまあいいや。修三、自分のやるべきことを勘違いするじゃねえぞ。勉強や学校を疎かにはすんな。

修三 ・・・・はい。

清 なんだよ？なんか言いたそうだな。

修三 もちろん勉強もちゃんとします。でも、僕は授業じゃ教えてもらえないことも大事だと思っんです。

清 馬鹿野郎、屁理屈を言うな。ま、おめえのことだから大丈夫だとは思っがよ。羽目は外し過ぎるなよ。

修三 気を付けます。ありがとうございます。

清 今日ちょっと話があるんだ、すまねえが学校に行くのはちょっと遅らせてもらえねえか？

修三 分かりました。

越智と勉、登場。越智が勉に絡んでいる。

越智 勉さんよお、俺あ情けねえよ。

勉 武さん、悪かったよ。もう勘弁してくれ。

越智 いいや、勘弁ならねえよ。そんなに土建ってのはいいんですかね？建物壊したり、道ほじくり返したり。蚊帳作りよりもそんなのが良いつてことですかい？

勉 いやあ、そういうわけじゃねえつて。ここらで俺も独り立ちしねえとつて思ったんだよ。

越智 あんたもう立派な蚊帳職人でしょう？だって俺が十年以上仕込んだんだもん。

勉 それはもう感謝してるよ。俺も兄貴も武さんのこたあ師匠みてえに思ってるよ。

越智 その仕込んだ愛弟子が蚊帳作り捨てるつてんだから、そりやググチ言いたくもなるつてもんでしようよ。

勉 助けてくれよ、兄貴。

越智 もういいんですよ、勉さん。そんなに道路工事がやりたいんなら好きなだけおやりなさい。

清 武さん、そのくらいで勘弁してやってください。こいつも一応考えてのことなんですよ。

勉 悪いね、武さん。

越智 ああ、いやな世の中になったもんだ。蚊帳職人が道路工事とはねえ。

清 まあ、そういうことで、明日からは武さんと俺と、それに修三の三人で工場は回していくことになる。

修三 はい。

清 修三、お前ももううちに来て4年半だ。

勉 ああ、もうそんなになるかね。

清 学校行きながらで大変だろうとは思うが、よろしく頼む。

修三 はい、頑張ります。

越智 清さん、勉さんいなくなって仕事がさばけますかね？

清 それは大丈夫なはずです。来年から注文量が少し減るんだ。

越智 え？本当ですかい？

清 本当なんだ。まあ、なんだ、やっぱり東京じゃ蚊帳が売れなくなってるんだな。

越智 ・・・考えられねえ。

清 そういうことだから、三人でもなんとかなると思います。

越智 分かりました。

勉 (少し改まって) 武さん、修ちゃん、今までありがとうございました。これからも兄貴のこと助けてやってください。

越智 今まで通り蚊帳作るだけです。

勉 まあ、当分この家を出るつもりはないから、顔は合わせることになると思うけどね。

修三 ……社長。

清 どうした？

修三 勉さんじゃなくて僕が辞めた方が…

清 馬鹿野郎。何言ってるんだ。

勉 そうそう、俺はもともと外に働きに出たいって思ってたんだよ。

越智 先代があので泣いてますよ…

勉 まあまあ、そう言わないで。だから修ちゃんは気にしないでくれよ。

修三 ……

清 修三、引きとめて悪かったな、もう学校行っていいぞ。

修三 え？

清 ぐずぐずすんな、遅刻するぞ。

修三 はい。行ってきます。

一同 （口々に行ってらっしゃいと言う）

修三、鞆を持って退場。少し沈黙。

勉 まあ、分かっちゃうよなあ。

清 ああ。

越智 そういうことですか。

勉 一応騙されたふりしてやってくんねえか？

越智 分かりましたよ。さっきはつまんない嫌味言っちゃまって…

勉 良いんだよ、武さん。

茨木の声 勉いるかー？

茨木、登場。

勉 実ちゃんどうした？

茨木 明日からだっけ働きに出るの？

勉 そうだけど。

茨木 そつかあ、土木関係だっけ？

勉 そうだよ。作業員ってやつ。

茨木 おめえは馬鹿だけど体は丈夫だからな、うってつけじゃねえか。

勉 馬鹿は余計だよ。

茨木 ……そつかあ、勉がねえ。

勉 ？

清 どうしたんだよ？とうとう頭おかしくなったか？

茨木 ……

勉 え？どうしたの、実ちゃん？

茨木 いやさ…先越されちまったなあって思ってたよ。

清 どういう意味だよ？

茨木 俺もそろそろ潮時なんだよ。

勉 紙芝居屋が？

茨木 ああ、もう駄目だよ。このままじゃ女房子供も養えねえよ。

清 そうか…

越智 世知辛い世の中になっちゃいましたねえ。

勉 まあ、そう落ち込むなよ。

茨木 いやあ別に落ち込んだじゃいねえけどよ。もう何年かは大丈夫だと思ってたんだけどなあ。

勉 このご時世仕事ならいくらでもあるんじゃないか？

茨木 ああ、そりゃ分かってるけどな。俺さ、実際けっこう気に入ってたんだよ、紙芝居屋。

勉 ああ、子供好きだもんね。

茨木 そうなんだよ。ほんの何年か前まではよ、目キラキラさせて俺の紙芝居待ってくれてるガキがあちこちにいたんだけどなあ。

越智 最近のガキは紙芝居見ねえのか？

茨木 うん、もうみんなテレビだねえ。皇太子様のご成婚とかオリンピックとかで増えたからねえ。

越智 そんなにテレビの方がいいかねえ。

茨木 そりゃそうでしょう。俺がガキでもテレビの方を選ぶよ。紙芝居なんて古いわ、やっぱり。

勉 自分で言ったりや世話ねえな。

茨木 話は変わるが、清よ。

清 なんだよ？

茨木 おめえんとも厳しいんだろ？

清 うるせえよ。

茨木 隠すなよ、人減らすってのはそういうことだろ？

清 ……

勉 参っちゃうよ、注水量が減っちゃうんだって。

清 馬鹿、そういうことべらべら喋るんじゃないか。

茨木 いいじゃねえかよ、そんならい。

清 よかねえよ。

茨木 あだよ、清。

清 あんだよ？

茨木 退き時誤んなよ。

清 あん？

茨木 いや、俺あおめえを心配して言っただぞ。おめえは堅物だからよ、死んだ親父さんに義理立てしてえんだろ？

勉 さすが幼なじみ、よく分かってらっしゃる。

清 余計なお世話だ。

茨木 そんなことあ分かってるよ。死んだ人間に義理立てするより、てめえの行く先ちゃんとかえろよ。

清 ……あのなあ実。俺も死んだ親父に義理立てしてるわけじゃねえんだよ。

茨木 そうなのか？

清 気楽なおめえと違ってこっちは人を雇ってる立場なんだ。ちよつと風向きが悪くなつたからって、ハイさよならってわけにやいかねえだろうが。

茨木 ……まあ、そりやそうだな。

清 俺はあと何年かは石にかじりついてでもこの工場を守るよ。

茨木 おめえに考えがあつてのことなら別にいいんだ。ただ傷が深くなる前にけつまくるつてのもありだつてことは頭に入れとけよ。

清 ……だから余計なお世話だつての。

茨木 (軽く笑つて) 悪かったな。よし勉、一杯やるか？

勉 へ？

茨木 門出だからな、おごつてやるよ。

勉 いいよ、割り勘で。

茨木 遠慮すんなよ。

勉 だつて女房子供も養えないんじゃないの？

茨木 ……じゃあ、悪いけど割り勘で。

勉 兄貴たちはどうする？

清 気が向いたら後で行くよ。

勉 武さんは？

越智 女房が飯作ってるんで。

勉 はいよ、じゃあ行こうか。

茨木 おう。またな清。

清 もうくんなよ。

茨木 武さんも、また。

越智 はいよ。

勉、茨木、退場。沈黙。

越智 清さん。

清 なんですか？

越智 俺は先代と先々代にや恩があります。ガキの時分から可愛がってもらいました。

清 いや、恩があるのはこっちですよ。

越智 この越智武雄が今こうしてるのは、この工場があつてこそです。だから、清さんの足を引つ張るようなことあしたくねえ。

清 武さんが足を引つ張るなんて・・・

越智 もし俺が邪魔になつたらいつでも言つてください。俺あこの腕さえあれば、よそでもやつていきます。

清 馬鹿な事言わないでくださいよ。そんなことしたら俺が親父や祖父さんに合わす顔がなくなります。

越智 でも・・・

清 もし畳むにしても武さんの身の振り方はこっちで悪いようにやしません。それに・・・

越智 なんですか？

清 うちにやまだまだ武さんの腕が必要です。どんだけやれるか分かんねえけど、一緒に頑張りますよ。あと何年かは畳むわけにやいかないんです。

越智 修三のことがあるからですかい？

清 ……

越智 なら高校卒業させるまでは？

清 あいつね、大学にも行きたいんですよ。

越智 大学！

清 その為に必死で金貯めてるんです。

越智 そうですか。

清 ……俺はその手助けをしてやりたい。だからそれまでは工場畳むわけにやいかないんです。

越智 分かりました。俺も精一杯やらせてもらいます。

清 ありがとうございます、武さん。

越智 ……やっぱり親子ですね、そういうところ親父さんにそっくりですよ。

清 え？そうですか？

越智 あの人も、それで損ばっかりしてましたよ。

清 ああ、そう言えばそうでした。

越智 でも俺は尊敬してましたよ、親父さん。

清 はい。

越智 じゃあ、失礼します。

清 お疲れさんでした。

越智、退場。清、それを見送り、なんとなくあたりを見回す。

年老いた修三の声　あの頃、私の傍にいた大人たちの親心が分かっていれば、きっと違う人生があったのだろう。そんな愚にもつかないことを最近考える。しかし、つくづく思うのは親心というものは、思われる方にはなかなか伝わらず。伝わった時には常に手遅れなのだ。

第三幕　昭和42年

年老いた修三の声　東京オリンピックから、時代の流れは更に早まっていったように思う。より豊かにより便利に、あの頃の日本人は大抵がそう考えていた。そしてそれを追求したが故に、人々の内面が変化していった。オリンピックの三年後、昭和42年。小林蚊帳に集う面々にも変化が訪れていた。

夏場のとある夕方、清、悦子、松尾が暗い顔で座り込んでいる。しばし沈黙。やがて清が黙って松尾に頭を下げる。悦子も頭を下げる。

清　松尾さん、この通りです。考え直してもらえませんか。

悦子　お願いします。

間

松尾　小林さん・・・そんなことされても困ります。

清　しかし・・・

松尾　私共としてもこれで精一杯です。この夏以降の取引量は半分にさせていただきます。

清、悦子、頭を上げるが何も言えない。沈黙。

松尾　正直に言います、上の方ではもう今年から蚊帳の取り扱いが中止にしてはどうかと言われました。

悦子　そんな・・・

清　そうですか・・・

松尾　それではあんまりだと思い、何とかその話は先延ばしにできました。

清　それでも半分というのはあんまりです。

松尾　勘弁してください、これ以上は私にはどうすることもできません。

清　・・・

悦子 あのこと。

松尾 なんでしょう？

悦子 取引自体はこれからも今まで通り続けていただけると思っているんでしょうか？

松尾 ……

清 松尾さん？

間

松尾 上次第なんですけど、今まで通りずっとというのはお約束できません。

清 松尾さん、そりゃあんまりでしょう。うちとそちらの仲じゃありませんか。

松尾 私もほかならぬ小林さんですから上を説得して何とか即時中止は避けることができました。……これが私の精一杯です。

清 (興奮して立ち上がる) ちよつと待ってくださいよ！取引は半分、それもいつまで続くかは分からないってことですかい？

松尾 ……もつと言えば、長くても数年以内で藤井寝具店は蚊帳の取り扱いをやめます。

清 松尾さん！

悦子 あんた、落ち着いて。

松尾 ご理解ください、蚊帳はもうこの東京では過去の物になりつつあります。うちも商売ですから、売れない物を扱い続けるわけにはいかないんです。

清、座り込む。沈黙。

清 じゃああと何年かは取引切るまでの猶予ってことですか。

松尾 ありていに言えばその通りです。……清さん、時代が変わったんですよ。

清 そりゃ分かっていますよ。家が変われば蚊帳は売れなくなる。

松尾 それもあります。だけどそれだけじゃないんです。

清 どういう意味ですか？

松尾 うちの会社もこの何年かで大いぶが入れ替わりました。今の上の人間は、商売のことは数字でしか考えません。何十年の付き合いとかそういう人間関係の出る幕はないんです。

清 そつちはそれで良くっても、こつちはそうはいきませんよ。ずっと持ちつ持たれつで、無理聞きあつてきた仲じゃありませんか。

松尾 まったくもつてその通りです。でもその理屈で動く会社はどんどん減っています。時代に取り残されない為には変わっていかなくやいけないんですよ。

清 まったく納得できませんよ。

松尾 ……申し訳ありませんが全て決定事項です。うちの取引のあるうちに、今後には備

えて準備することをお勧めします。

清 準備ってなんですか？

松尾 それはご自分で考えてください。あまりできることはないかもしれませんが、何かあったら相談には乗りますよ。

間

清 まずは出ていく分を減らして、店じまいの準備ってことですか？

松尾 妥当な線だと思います。

悦子 出ていく分って・・・

清 ああ。

松尾 まずは人件費ですね。

悦子 あんた、まさか武さんと修ちゃんに辞めてもらうってこと？

清 ・・・・

松尾 可能なら二人とも辞めてもらった方がいいでしょうね。

清 松尾さん、そういうわけにはいかないんですよ。ずっと良くやってくれてる武さんと、なんとか夜学と両立してる修三をほっぽり出すような真似はできません。

松尾 そう言うと思ってました。その事情はよく分かるつもりです。私が言ってるのはあくまで現実的なことで、人の気持ちとかを加味したものではありません。どうするかを決めるのは小林さん自身です。

清 ・・・・

松尾 ただうちとの取引は数年以内に確実になくなります。それを踏まえてこれからのことを考えてください。

間

清 泣き言を言うようですね・・・

松尾 はい。

清 お宅んとこの上の人間ばかりじゃない・・・松尾さん、あなた自身も変わりましたね。

松尾 ・・・・これも商売ですから。

沈黙。手土産（新聞でくるんだバナナ）を持った勉が入ってくる。

勉 こんばんはあ。

悦子 勉さん、こんばんは。

勉 あ、松尾さん。お久しぶりです。

松尾 お久しぶりです。

勉 家の方誰もいなかったからこっちかと思って。義姉さんこれお土産。(渡す)

悦子 バナナじゃない！自分とこの分は買ったの？

勉 おう、うちの分と一緒に買ったから。

悦子 君子さん、具合どう？

勉 (腹ぼての手ぶり) いやあ、もうこんなお腹でふうふう言ってるわ。

松尾 (清に) それじゃあ、今日はこれで。

勉 あれ？もう行っちゃうんですか？

松尾 はい。

清 (無言で頭だけ下げる)

悦子 松尾さん、お気をつけて。

松尾 はい、失礼します。勉さん。

勉 はい。

松尾 奥さん、大事に。

勉 ありがとうございます。

松尾 じゃあ。

松尾、退場。沈黙。勉がなんとなく空気を察して口を開く。

勉 何かあった？

悦子 ……ちよっとね。

清 (黙ったまま退場しようとする)

勉 兄貴？

清、退場。

勉 どうしたの？

悦子 ……うん。

勉 取引中止？

悦子 え？

勉 まあ、そのうちそうなるとは思ってたけどなあ。

悦子 あ、でもすぐじゃないの。数年以内につて言ってた。それより……また人減らしを
しなきゃいけなくなりそうなの。

勉 ……なるほど。そりゃ兄貴もああなるか。

悦子 ごめんなさいね。

勉 え？
悦子 三年前は工場の為に貧乏くじひいてもらったのに、結局こんなことに・・・
勉 仕方ねえよ。三年前にも言ったけど、もう蚊帳の売れる時代じゃないんだから。
悦子 そうね。
勉 兄貴も割り切って考えてくれればいいんだけどなあ。
悦子 あの人、責任感強いからね。

間

勉 あのさあ、義姉さん。
悦子 何？
勉 兄貴には悪いけど、潮時じゃねえかな。
悦子 ……
勉 意地張ってもロクなことになんねえよ。まだ借金はしてないでしょ？
悦子 ええ、なんとかね。
勉 なら今のうちだよ。景気は相変わらず上向いたまんまだ、体さえありや身の振り方は何とでもなる。このいい加減な俺が三年で所帯持てたんだぜ？蚊帳になんてしてみつかなくたって・・・
悦子 そういう言い方はしないで。勉さんだってその蚊帳のおかげで大きくなれたんですよ？
勉 そりゃそうだけど。
悦子 あの人だって分かっているのよ。それでもさ、世の中のしがらみって自分のことだけ考えてすっぱり割り切れるものじゃないでしょ？
勉 古いよ義姉さん。
悦子 そうかもね。でも、あの人も私も古い考えの人間だから仕方ないのよ。
勉 ともかく今のうちに商売替えを考えた方がいいよ。義姉さんからも兄貴に言ってやってくんねえかな。
悦子 自分で言いなさいよ。
勉 (苦笑) まあ、言ってみるけど、兄貴ガキの頃から頑固だからさあ。自分で納得いかなきゃでこでも動きやしねえ。
悦子 (笑う) ホントそうね。
勉 (立ち上がる) じゃあ、まあ今日のところはこれで帰るわ。
悦子 もう帰っちゃうの？
勉 うん、また出直すよ。
悦子 分かった。君子さんによく言って。手伝えることがなんでも手伝うから。
勉 ああ、そんな時やよろしくお願ひします。

悦子 初産なんだから大事にね。
勉 はいはい。それじゃあ。

勉、退場。悦子、それを見送り退場。転換。一月後の昼下がり。越智、修三、登場。

修三 今日の分、終わっちゃいましたね。

越智 そうだな。

修三 まだ2時にもなってないですね。

越智 そうだな。

修三 社長、どこ行かれたんでしよう？

越智 ……まあ、気にすることはねえよ。用事があったんだろう。

修三 どうしましょう？掃除は朝やりましたし、機械の手入れしときますか？

越智 昨日もやったらう。

修三 はい……

越智 やることないんだから休んでろよ。

修三、片隅から本を出してきて読みだす。越智、その様子を見て。

越智 勉強してるのか？

修三 ああ、いや、そういうわけでも……

越智 何読んでるんだよ？

修三 資本論です。

越智 なんだそりゃ？

修三 えーっと、簡単に言うと、どうやったら貧乏がなくなるかっていう理論を研究している本です。

越智 貧乏がなくなる？すげえじゃねえか……

修三 あ、でも、そう簡単にはいかないと言うか、社会そのものを作り替えなきゃいけないみたいです。

越智 はあ、ずいぶん難しい本読んでるんだな？

修三 正直難しいです。ちゃんと理解してるとは言えません。

越智 それでも大したもんだよ。

修三 ありがとうございます。

間

越智 修三。

修三 なんですか？

越智 どうなんだ？大学の入学金は貯まったのか？

修三 （嬉しそうに）はい！この分なら来年度に間に合いそうです。入学さえできれば、後は奨学金を取って頑張れます。

越智 そうか。長かったな。

修三 実家にも仕送りしてらんで時間かかっちゃいました。

越智 偉いもんだな、おめえは。

修三 当たり前のことですから。

越智 うちの倅どもに爪の垢、煎じて飲ましてやりてえよ。てめえで稼いでるくせに、親に仕送りなんて考えもしねえ。

修三 うちの実家は貧乏ですから、仕方ないですよ。僕等兄弟の仕送りで、下の弟たちは高校にやれそうなんですよ。

越智 そりゃいいことだな。

修三 はい。だから、大学入学が何年か遅れてもそれは仕方ないことだと思えます。

越智 なるほどな。ところで一つ聞きてえんだが。

修三 なんですか？

越智 おめえはよ、大学行って何をしたいんだ？

修三 え？それは勉強を・・・

越智 何を勉強してえんだよ？

修三 ・・・・

越智 悪いな変なこと聞いて。ただ聞いてみてえんだよ、俺みたいな職人にや、大学なんて遠い世界の話だからよ。

修三 そうですねえ（考える）

越智 俺はよ、大正生まれで小学校しか出てねえしがねえ職人だ。俺らの頃は上の学校に行くのは金持ってる家の子だけでよ、普通の家の倅は小学校出たら働きに出るのが当たり前だったんだよ。だから俺も別にそれがおかしいとは思わなかった。

修三 ・・・・本当はおかしいんですよ、それ。

越智 あ？

修三 お金のあるなしで人生が違うなんておかしなことです。

越智 そうか？そんなんはあたりめえのことじゃねえのか？

修三 今までの当たり前が、これからの当たり前じゃなくてもいいんです。むしろ、そんな不公平な当たり前は早くなくなるべきです。

越智 難しいこと言うな、おめえは。

修三 僕のようなお金のない家に生まれた人間が、どうしたら高い教育を受け、望んだ職業に就けるのか。そんな世の中はどうすればできるのか。僕は大学に行って、そういうことを勉強したいと思ってます。

越智 なるほどなあ……。でもよお、だんだんと日本はそういう風になってるんじゃないやねえか？

修三 え？

越智 俺の頃と今と比べれば、なんもかんもが段違いだ。おめえだって苦労しながらでも上の学校に行けてるじゃねえか？

修三 でもそれは、たまたまここで良い職場と人に恵まれたおかげです。それがなければ、自分でもっともつと苦労しなければ高校にも行けなかったはずです。そういう偶然とか人の善意に頼らなくても、貧乏人が機会を掴むことができる社会にしたいんです。

越智 難しいことは分からねえが、まあ、頑張れよ。15でうち来たときやとんだ田舎もんだったけどよ、いい若いもんになったじゃねえか。

修三 ……皆さんのおかげです。

越智 ああ、その気持ち忘れるなよ。

修三 勿論です。武さんには蚊帳のこと一から教えてもらいました。

越智 俺のことはいいんだ。清さんだよ。清さんと悦子さんはおめえの一番の恩人だ。分かってるだろ？

修三 はい……

越智 恩を仇で返すような真似だけはすんなよ。どんなに時代が変わろうが、それだきやしちゃいけないことだ。

修三 ……

越智 肝に銘じとけよ。義理を違えたら、いつか自分で自分が許せなくなるんだ。そうなたら男はおしめえだ。

修三 分かりました……。忘れません。

越智 ……なんてな、柄にもねえこと言っちゃまった。俺も年取ったもんだぜ。古いって思うだろ？

修三 いいえ。

越智 まあ、こういうこと言えるのも、これで最後かもしれねえしな。

修三 どういう意味ですか？

越智 もう少ししたら、俺はここを辞める。

修三 ……え？

越智 奈良の会社に行くんだ。あつちは蚊帳の本場だからな。清さんが頭下げてくれてな、勤め先見つけて来てくれたんだ。

修三 奈良に引っ越すってことですか？

越智 そりゃそうだろう。今むこうの社長さんがこっちに来てるんだ。清さんがいねえのは俺の為に挨拶に行ってくれてる。

修三 ……

越智 東京にやもう蚊帳職人の行き場はねえってんだから、都落ちも仕方ねえわな。

修三 武さん・・・

越智 なあ、修三。社長は俺じゃなくておめえを残すって決めたんだ。その意味よく考えろよ。

間

越智 なんだよ、そんなしけた面すんな。

修三 武さんは・・・

越智 なんだ？

修三 武さんはそれでいいんですか？

越智 俺は蚊帳職人だ。俺にやこれしかない。さっきはああ言ったが、倅ども一人立ちして気軽の身の上だ。蚊帳作りを続けられるならどこでも行くさ。

修三 でも・・・

越智 大丈夫だ。おめえが気にするこっちゃねえ。

沈黙。清、登場。

清 ただいま。

修三 お帰りなさい。

越智 清さん、お帰りなさい。向こうの社長さん、どうでした？

清 (修三を気にして) 武さん・・・

越智 こいつにや、俺から話しました。

清 そうですか・・・あの、今から出られますか？武さんと会って決めたいそうです。

越智 もちろんです。見ての通り、仕事がなくて油売ってるところでしたから。

清 腕のいい職人ならこちらからお願ひしたいって言っていました。多分、大丈夫だろうと思えます。

越智 ありがとうございます。

清 俺は何も。当たってくれたのは松尾さんですから。

越智、出る為の身支度を始める。沈黙。

修三 あの・・・

清 なんだよ？

修三 (何も言えない)

越智 (準備を終えて) じゃ行きましようか、清さん。

清 はい。修三、俺らが戻るまで好きにさせていいぞ。

修三 ……はい。行つてらっしゃい。

清 ああ。

越智 行つてくるぜ。(修三の肩をポンと叩いて出ていこうとする)

清、越智、退場。転換。それからまた一月過ぎたある日曜日の昼間。清、茨木が将棋を指している。二人ともあまり集中はしてない。

茨木 (清が指した手を見て) え?そこか?

清 (盤面を見直す) あ、間違えた……

茨木 直していいぞ。

清 (無言で打ち直す)

茨木 なんで日曜の昼間っから将棋なんだよ。

清 ……いいじゃねえか、たまにや付き合え。

茨木 ま、こうすんのも久しぶりだわな。

清 おめえが不動産屋に勤めだしてから忙しくなったからな。前は散々うちで暇つぶしてたくせによ。

茨木 (一手指して) いい歳して使いっ走りの小僧みてえな仕事ばかりだけどな。

清 (一手指して) 金回りはいいみてえじゃねえか。勉が言つてたぞ。

茨木 紙芝居やつた頃よりかはましになったな。会社は繁盛してるよ。アパートは増えるし、入る人間はもっと増える。

清 そのアパートにや網戸が一軒一軒みんな付いてるんだろう?

茨木 俺に嫌味言つても仕方ねえだろうに。(一手指して) で、武さんは?

清 母屋だよ。悦子と勉が相手してくれてる。ついでに修三もな。

茨木 なんておめえが相手しねえんだよ?カミさん連れて最後の挨拶にきてるんだろう?

清 (一手指して) 別にいいじゃねえか。

茨木 よかあねえよ。明日には奈良に行つちまうつてのによお。

清 うっせえな。最初はちゃんと挨拶したよ。

茨木 ……どうせおめえのこつた、合わす顔がねえとか思ってるんだろう?

清 (舌打ち) 早く指せよ。

茨木 気持ちは分かるけどよお、そりゃ不義理つてもんだろう。(指す)

清 奈良に行つてもらおう時点で義理もクソもねえだろう。四十年も真面目一筋に勤めてくれたのによお。

茨木 俺らが物心ついた時にやもうここにいたもんなあ。

清 (指す) その挙句こんな追い出すみてえによお。

茨木 (指す) 王手。

清 待った！
茨木 待ったなし。もうやめようぜ、ちゃんと指す気ねえだろうおめえ？
清 ……そんなこたあねえよ。
茨木 (将棋盤の上をかき回す) 腑抜けた将棋しやがって、しらけるわ。
清 (散らかった駒を片付ける) 悪かったな。

間

茨木 だから言ったじゃねえか・・・
清 なんだよ？

茨木 身の振り方考えとけてよ。

清 ……

茨木 結局はこうなっちまったじゃねえか。もっと計画的に畳んどけば武さんを都落ちさせることもなかったんじゃないか？

清 おうおう、羽振りのいい奴は言うことが違いますねえ。たまたま拾われた不動産屋が儲かっているからお説教ですかい？

茨木 つまんねえこと言うなよ。それにそんないいもんじゃねえよ、不動産屋なんて。あつちのものこつちに動かすだけで金もらってんだからよ。

清 作ったもんが売れねえよりはましじゃないか？

茨木 ……そう思うんらおめえもこつち側に来いよ。

清 俺あ職人だ。あぶくみてえな商売は性に合わねえ。

茨木 (苦笑) 俺だつて楽しくてやってるわけじゃねえよ。稼ぎの為だ、仕方ねえじゃねえか。

清 嫌な世の中だよなあ、おめえみてえな脳天気が金金つてうるさく言うようになってしまったよ。

茨木 俺は嫌だとは思わねえよ。実際よお便利で物のある世の中になってるんだからよ。

清 みんながみんな金だ金だつて言い出したら、世の中どうなっちゃうんだよ？便利で物があるつてのあそんなに良いことかねえ。

茨木 当たりめえじゃねえか。誰だつて貧乏よりか金のある方が良いに決まってる。ガキの頃思い出してみるよ、はるかになしな世の中になってるじゃねえか。

清 そりゃ認めるよ・・・だけど昔だつて悪いことばかりじゃなかったぜ。

茨木 まあ俺だつてそう思うけどよ・・・清よ、おめえの今言ったこと、逆だぜ。

清 言ったこと？

茨木 みんな金金つて言うから世の中が変わるんじゃないか。世の中が変わったから、みんな金金つて言ってるんだよ。

清 ……

茨木 結局のところ、俺たち日本人ってのは、アメリカみたい便利で何でもある生活にみんなが憧れた。そこでこの国がそうなる道を選んだんだよ。

清 俺は選んだつもりはねえよ。

茨木 俺もだよ。選んだつものの奴なんかほとんどいやしねえ。でもあの戦争の裏返しなのかもな。貧乏を憎んで、物を欲しがる気持ちで日本を復興させた。復興どころか今じや世界有数の経済大国だよ。言っちゃえば金の話と引き換えに、昔のことは捨てて前に進むことを選んだつてことじゃねえか。

清 だから俺は選んだつもりはねえ。

茨木 そんなじゃあおめえじゃねえ誰かが選んだんだよ。その誰かっるのが時代なのかもしれないねえな。そこでその通りに日本は進んでる。もうこの道から外れることはねえよ。

清 ……おめえ、ずいぶん賢そうなこと言うようになったじゃねえか。

茨木 茶化すなよ、馬鹿。これでも頑張つて勉強したんだぜ。

清 なんで？

茨木 そうさなあ……取り残されない為に……かなあ。

清 ……なんだかおめえじゃなくて別の奴と話してるみてえだ。

茨木 勉強だつて、ああ見えて色々考えてるぜ。ここで呑気な次男坊やつてた頃とはまるで違う。

清 ああ、最近色々説教がましいこと言ってくるよ。

茨木 あいつも俺も言いてえことは多分同じだよ。悪いことは言わねえ、無理に時代の流れに逆らおうとすんな。

清 別にな、俺だつて好きでこうしてるんじゃないやねえんだぞ。むしろ時代とかいうわけのわからねえもんが、うちを置いてけぼりにしちゃまったんだよ。

茨木 だからよ、それが分かってるなら、蚊帳は早くやめろつて話だよ。

間

清 そう簡単にやいかねえんだよ。

茨木 頑固な野郎だなあ。

清 ほつとけ。

悦子、勉、清を呼びながら登場。

勉 兄貴い。

悦子 あんたあ、ちよつと。

清 ……なんだよ。

悦子 武さんたち、帰るつて。

清 そうか。

茨木 え？早くねえか？

悦子 準備も色々あるからって。

勉 あれ、実さん、来てたの？

茨木 ああ、ちよつとこいつに呼ばれてな。

勉 なんだよ、声掛けてくれりゃいいのに。

茨木 後でかけるつもりだったんだよ。

越智、修三、続けて登場。

越智 清さん、すみません。ちよつとご挨拶いいですか？

清 武さん・・・はい、大丈夫です。

越智、清の前に正座する。姿勢を正す清。悦子、勉、清の隣に座る。

越智 清さん、悦子さん、それに勉さん。なげえこと本当にお世話になりました。先程、先代先々代にも手を合わさしてもらいました。どうぞ皆さん、お元気で。

清 ・・・・武さん、本当に申し訳ねえ。(頭を下げる)

越智 よしてください。清さんが俺に謝ることなんかありませんよ。

清 ・・・・はい。(うつむき黙ってしまう)

悦子 (清の様子を見て) 武さん、今まで本当にありがとうございました。向こうでもどうかお元気で。

越智 ありがとうございます。

悦子 あつちでも奥さんと仲良くね。

越智 いやあ、お恥ずかしい。ついてこなくてもいいつつたんですけどねえ。

悦子 こつち戻った時は、元気な顔を見せてください。

越智 はい。

勉 武さん、お世話になりました。すいませんね、親子兄弟揃って世話になって。

越智 なかでも勉さん、あんたが一番覚えが悪かったですけどねえ。

勉 もう忘れてよ、そういうのは。

越智 蚊帳作り捨てた時は腹も立ちましたがね、どうやらそういう時代でもねえようだ。どんな道でもしつかりやってください。

勉 はい。

茨木 武さん、奈良でも元気でやってくださいよ。

越智 はいはい、あんたもお元気で。

茨木 また会いましょう。

越智 はい。そんじや、名残惜しいですけど、準備もありますので、俺はこの辺で失礼さしてもらいます。

清 ……はい。道中、お気をつけて。

越智 ありがとうございます。

悦子 そう言えば、新幹線に乗るんですか？

越智 はい。大阪まで三時間ちよつとつて言うでしょう。こつちにや信じられねえ話ですよ。

勉 本当に速いよ。すぐ着いちやうからね。

茨木 乗ったことあるのか？

勉 最近、仕事であち行くことがあるから。いや、ビールでも飲んでたらすぐだよ。

越智 なんだかそれも味気ねえ気がしますね。

修三 武さん。(越智の前に座る)

越智 ？

修三 ……

越智 どうした？

修三 色々お世話になりました。

越智 おう。おめえも元気でな。

修三 本当に…申し訳ありません。武さんが僕に…

越智 (遮って) やめろやめろ。おめえに謝られることなんて何もねえ。

修三 武さん…

越智 勉強頑張れよ。

修三 ごめんなさい、武さん…

清 馬鹿野郎、謝る奴がいるか。(軽く頭を叩く)

修三 でも…

清 修三、こういう時はごめんなさいじゃねえ。考えてみる。

修三 ……武さん、ありがとうございます。

越智 ああ。(立ち上がった) それじゃ、失礼します。

清 ああ、そこまで送りますよ。奥さんは？

悦子 客間で待ってらっしゃるわよ。

清 そんじや、早く行きましょう。

越智 はい。

清、悦子、越智、退場。修三も少しうつむいているが三人を追って退場。茨木は動かず難しい顔をしている。一旦出ていこうとした勉、それに気が付いて声を掛ける。

勉 どうした？

茨木 いや、なんかよお、いたたまれねえなあ。

勉 どういう意味よ？

茨木 誰が悪いわけでもねえんだけどなあ・・・

勉 そりゃ言っても仕方ねえこつたろう。

茨木 まあな。

勉 行こうよ。

勉、茨木、退場。 転換。

年老いた修三の声

高度経済成長期は「東洋の奇跡」とまで言われるほどの目覚しいものだったが、当事者である私達にその実感は乏しかった。ただ目まぐるしく何かが変わっていったという感覚は残っている。だからこそ、あの頃を思い出す時一番先に心に浮かぶのは、共にあの時代を生きた人々の優しい心なのだ。

第四幕 昭和45年

年老いた修三の声

東京に出て十年後、昭和45年。私にとってはあの優しい時代の最後の年。25歳になっていた私は大学生であり、社会を変えろという見果てぬ夢の虜（とりこ）となっていた。60年代というお祭りのような時代が終わった1970年。その年は私にとって生涯忘れ得ぬ年となった。

春の午前中、清、松尾が無言で向き合っている。沈黙。

松尾 お力になれず、申し訳ありません。（頭を下げる）

清 いえ・・・分かりました。

松尾 では予定通り次の納品までということだ。

清 結構です。

松尾 ご理解いただけで助かります。

清 覚悟はどうにできてますんで。

松尾 いいえ。

沈黙。勉、登場。

勉 兄貴、いるかい？

清 ……おう、勉。

勉 あ、松尾さん。ご無沙汰です。

松尾 どうも。(清に) それじゃ私はこれで。
清 はい。

松尾、退場。勉、そのそっけない様子に苦笑。清が声を掛ける。

清 どうしたよ？平日のこんな時間に。

勉 聞いたよ、修三のこと。

清 そうか・・・

勉 今日、こっち戻ってきてすぐに、女房から聞いたんだ。

清 今、どこで仕事してんだ？

勉 前も言ったら、名神の次は北海道で高速作ってんだよ。あ、そうだ。これ土産。カニ

缶。(ポケットから数個缶詰を取り出して渡す) 焼き飯に入れたらうめえよ。

清 女房子供置いてご苦労なこったなあ。

勉 もう慣れたよ。それよかよお、なんだって修三が警察に捕まったんだよ？

清 ・・・・

勉 あれだろ？どうせ全共闘だかの学生運動がらみだろ？

清 安保闘争のデモで警官隊に石投げちまったんだとよ。

勉 何日前の話よ？

清 もう一週間になるな。

勉 まったく何考えてやがんだよ。

清 まあ、セクト？つて言うのか？そういうのとはあんまり関係ねえみてえだから、不起

勉 訴で釈放だつてよ。

清 なるほどね。・・・なあ兄貴よお、あいつは自分の立場分かってやがるのかね？

勉 さあな。

清 そんなで、どうする気だよ？

勉 あん？

清 あんにやろう、兄貴の恩を仇で返してくれたわけだろう？

勉 俺のことはどうでもいいだろう。

清 そうはいかねえよ。この十年、あいつの面倒見てきたのは兄貴だ。だからこそ、俺あ

勉 許せねえんだよ。

清 ・・・・

勉 大体、俺は全共闘だかブントだか赤軍だか知らねえけど、ああいうガキどもが大っ
嫌いだ。ついこの前もハイジャック事件があつたら。何が「われわれは明日のジョー
である」だ。ただの犯罪者がかっこつけやがって。

清 修三はああいう連中とは違うぞ。だからすぐ出てこられるんだ。

勉 生半可の連中も気に食わねえよ。そういう奴らはいい会社に就職した途端に、大学出

だからって偉そうに現場の俺らを下に見やがるんだ。てめえの力だけで大学出たわけでもねえくせに。

清 それは修三とは関係ねえだろう。あいつは自分の力で進学してんだ。

勉 そんなこたあねえよ。あいつが進学できたのは兄貴と義姉さんが途方もねえお人よしだからだ。

清 今は俺はなんもしてやってねえよ。学費やらはあいつが奨学金で何とかしてるんだ。でもうちでの働き方は受験や学校の都合のいいようにずっと合わせてやってきたんだろう？俺や武さんの首まで切ってさ。

清 ……すまん。

勉 ごめん。責めてるわけじゃねえんだ。お人よし過ぎるって言うてるだけだよ。

清 ……悪かったな。

勉 散々うちの世話になっというて警察沙汰ってどうなんだよ？…あいつがあんな暴力学生どもと同じになっちゃうとはなあ。がっかりだよ。

間

清 ところでよ、勉。

勉 なに？

清 ちょっとおめえにも話ときてえんだが…

悦子の声 たいいまー。

勉 あれ？義姉さんどっか行ってたの？

清 ……修三の奴、帰ってきたぞ。

勉 え？どういうこと？

清 今日、釈放だったんだ。

勉 (立ち上がる) 本当かよ。……そんじや俺は行くわ。

清 会ってかねえのか？

勉 言つたら、俺ああいう連中は嫌いだ。顔も見たくねえ。

清 ……そうか。

勉 ガツンとやってくれよ、兄貴。情にほだされんじやねえぞ。

清 早く行けよ。多分、すぐこっち来るぞ。

勉 ああ。じゃあまた近いうちに来るから。話はそんな時間くよ。

清 じゃあな。

勉、退場。悦子、修三、登場。

悦子 たいいま。

清 お帰り。
悦子 修ちゃん、座って。

修三、黙って座る。悦子、清の隣に座る。沈黙。

清 修三。

修三 ……

清 何とか言ったらどうなんだ。

修三 ……ご迷惑をお掛けしました。

清 若い時のやんちゃなら俺にも覚えがある。だけど警察沙汰は行き過ぎだろう。反省しろよ。

修三 はい。

清 田舎の父ちゃん母ちゃんのことも考えろよ。

悦子 そうよ。きつとご心配されてるわ。手紙でも電話でも、とにかくできるだけ早く連絡差し上げなきゃだめよ。

修三 ……はい。

清 これに懲りたらあんまり馬鹿な真似するんじゃないぞ。

修三 (顔を上げる)

清 なんだよ？

修三 僕、馬鹿な真似をしたとは思ってません。

悦子 修ちゃん…

清 なんだとてめえ。

修三 捕まっでご迷惑かけてしまったことは反省してます。本当にすいませんでした。でも、安保闘争は今やらなきゃいけないことなんです。安保がこのまま更新されたら、日本が米軍の補給基地になって、もっともっと沢山のベトナム人民が虐殺されます。

清 だからよお、そういうのは偉い奴に任しとけばいいだろう。おめえがやんなきゃいけないことじゃねえよ。

悦子 そうよ。あなたはまだ学生なんだから、まず勉強しなきゃいけないでしょ？

修三 僕はそうは思いません。政府や自民党に任せておいたら、もっともっと日本の社会は悪くなります。いつまでたつても不平等で、貧乏人は貧乏なまま。僕は社会を変えたいんです！

清 あのな、俺や普通の大人はな、そこまで世の中が悪いとは思ってねえんだよ。だからおめえらは暴力学生なんて呼ばれて白い目で見られるんだ。

修三 それはそうマスコミに思い込まされてるだけなんです。僕等は純粋に社会を良くしたいと願ってるだけです。だけど権力は僕らを恐れている。だから力づくで抑えつけようとするんです。暴力は良くないけど、権力との横暴とは戦わなきゃいけません。

清 偉そうなこと言いやがって。おめえなんか下っ端の下っ端だから一週間で出てこられたんだろうが。

修三 それはその通りです。でも僕はこれからもできる範囲で活動は続けるつもりです。じゃあまたデモで石投げるのかよ？

修三 もしまた戦わなければならなくなったら、そうするかもしれません。

悦子 何言ってるのよ。もうそんなことしちやだめでしょう！それで前科者になったらあなたが苦労することになるのよ。

清 それにな、石投げたくらいで世の中が変わるかよ？そんなことする暇あったら勉強しろ。よっぽど世の為人の為になるぞ。

修三 活動だって大事な学習です。

清 お前いくつになった？大人になればよ修三。後悔することになるぞ。

修三 絶対に後悔はしません。僕は社会を良くしたいだけなんです。

清 馬鹿野郎・・・

修三 清さん、悦子さん、我がまま言っただけで申し訳ありません。でもこれは譲れないんです。

間

清 あのな、修三。一つ言っておかきやいけないことがある。

修三

清 俺はここを畳むぞ。

修三

清 え？

悦子 さつき松尾さんが来てな。藤井寝具はもう蚊帳の取り扱いをやめるそうだ。そう・・・とうとうなのね。

清 もともと無理言っただけ、うちの為に何年か取引を続けてもらってたんだ。おめえだって何となくは気付いてただろう？

修三

清 はい。

清 意地張ってきたが、どうやらそれも限界だ。ここ何年か藤井さん以外の取引先も探してみたが見つかりそうもねえ。祖父さんからの家業を潰すのは悔しいが万策尽きたよ。打つ手なしだ。

修三

清 ・・・そうですか。

修三

清 問題はおめえの身の振り方だ。おめえ、どうするよ？いきなりそんなこと言われても・・・分かりません。

清

修三 ・・・まあそうだよな。大学卒業まで何とかしてやりたかったんだが、不甲斐ない雇い主ですまねえな。

清

修三 やめてください、清さん。僕そんなこと思ってません！

清 後は好きにしろなんて薄情な真似はする気はねえんだ。ただまずはおめえがどうし

てえかっつてのが一番だ。いきなり考えろって言われても困るだろうが、考えといてくれ。

修三 ……分かりました。

清 今日は好きにしていどうぞ。(立ち上がる)

清、退場。沈黙。

修三 僕がいけなかったんでしようか？

悦子 なにが？

修三 僕が警察に捕まったから、こんな急なことに……

悦子 それは違うよ、修ちゃん。残念だけど、勉強さんや武さんが辞めた頃から、いずれこうなるのは決まっていたことなのよ。

修三 ……はい。

悦子 逆にうちの人がこれまで頑張ってこれたのは、修ちゃんがいたからなの。

修三 僕が？

悦子 あんたが頑張って仕事も勉強も、それに貯金や仕送りも一生懸命やってたから、力になつてやりたいって。だから工場を潰すわけにはいかないって思ってたのよ。

修三 ……

悦子 そういえばさ。

修三 はい。

悦子 最近ご実家に仕送りしてないんですってね。

修三 ……

悦子 どうして？

修三 うちの両親に聞いたんですか？

悦子 でもお母様はあなたのこと責めてなかったのよ。むしろ心配してた。

修三 そうですか……

悦子 どうして仕送りやめたの？

間

修三 活動にお金がかかるんです。それに組織にカンパとかもしなければいけないんで。

悦子 ねえ修ちゃん。私、覚えてるよ。ご家族を貧乏から救いたって言ってたでしょ？

修三 はい。……だからこそ、社会を変えたいんです。貧乏のない世界を作りたいんです。

悦子 その気持ちはよく分かるのよ。でもね、それじゃ言ってることと、やっつてることが違うじゃない。それでいいの？

修三 ……

悦子 あなたは優しい子だから分かっているとと思うけど、一人で産まれてきて、一人で生きてきたわけじゃないでしょ？

間

修三 ……それは分かっているつもりです。

悦子 分かっているならいいわ。これからどうするか？どうしたいのか？ちゃんと考えて決めてね。

修三 分かりました。

悦子 約束よ。

修三 はい。

悦子 もう行っていいよ。

修三 (立ち上がり) じゃあ、大学行きます。

悦子 授業は夕方からじゃないの？

修三 はい。…でも仲間に会っておかないと。

悦子 それはあなたの言う組織のお仲間？

修三 はい。ごめんなさい悦子さん。僕は今、活動から離れるわけにはいかないんです。

修三、逃げるように退場。悦子、それを見送り、ため息をつく。転換。数日後の夜。清が難しい顔をして座り込んでいる。そこに悦子、登場。

悦子 あんた、寝たんじゃなかったの？

清 修三は？

悦子 まだ大学から戻ってないよ。

清 捕まる前と変わらねえなあ。

悦子 でも、ずっとあのことは考えてるみたいね。これから自分はどうするのかって。

清 そうだな。…そろそろ答えを聞いてみるか。

悦子 そうね。

清 帰ってきたら話してみるか。

間

悦子 ねえ、今日実家に電話してみたんだけど。仕事のことです。

清 義兄さん、なんて言ってた？

悦子 いつ来てくれてもかまわないって。というか早く来てくれて言ってた。ホントに人手が足りないみたい。

清 そうか。

悦子 ……ねえ、本当に宇都宮に来てくれるの？

清 ああ。ここが続けられねえなら、東京に未練はねえさ。おめえもお義父さんお義母さんが近い方が嬉しいだろ？

悦子 そりゃ、もちろんそうだけど。二人とももう歳だからねえ。

清 うちは二人とももういねえからな。俺の分まで親孝行してくれよ。

悦子 うん、ありがとう。

清 しかし蚊帳職人から牛乳屋とはねえ。

悦子 農地売ってどうするのかと思っただけど、兄さんうまいことやってるみたい。

清 俺に務まるかは分かんねえけどな。

悦子 あんたなら大丈夫よ。

清 義理とはいえ兄弟の店だ。いくらかは気が楽だよ。近いうちに挨拶に行くって伝えといてくれ。

悦子 みんな喜んでくれると思うよ。

清 ああ、何よりだ。

悦子 ……それでね。

清 なんだ？

悦子 もう一人くらい連れてきても問題ないって。

清 ……ひよっとして修三のことか？

悦子 うん……

間

清 あいつはこっちで大学を卒業した方が良い。そこまで付き合わせる気はねえ。

悦子 でも聞いただけ聞いてみようよ。なんなら、卒業した後だっにかまわないじゃない。

清 それならなおさらだ。さんざん貧乏して苦労して、やっと大学出て。もっという仕事はいくらでもあるだろう。

悦子 そりゃ分らないよ。このまま学生運動続けてたら、採ってくれる会社だっかないかもしれないじゃないか。

清 そこまでしてやることはねえよ。

悦子 なんでよ？十年も一緒にやってきたんだよ。家族みたいなもんじゃないか！できることなら傍に置いておきたいじゃない。あんただって本当はそう思ってるんじゃない？

間

清 そう思わねえって言ったら嘘になるな。
悦子 でしょう？

清 だけどそれをあいつに押し付けるのは俺たちの自分勝手ってもんだ。修三の為にやらねえ。

悦子 どういうことさ？

清 あいつあ一丁前の男だ。もう俺の助けなんかいらねえ。一人立ちした方がいいんだよ。
悦子 ……

清 どうした？

悦子 そんなこと言うとは思わなかった。あんたあの子のやってること良く思ってたでなかったでしょ？

清 ああ、もちろん今でも苦々しくは思ってるよ。あんなのは若気の至りってやつだ。どうせ後になって馬鹿なことしたって思うに決まってる。…でもよ、その後悔も含めてあいつの人生だ。いつかそれが身になる時だつて来るかもしれねえ。そんならあいつはあいつの好きにしたらいいんだ。

悦子 女だからかね、私はそんな風には突き放せないけど…

清 頼もしいじゃねえか、あの田舎丸出しのガキだった修三が、いっばしの口きくようになつたんだ。

悦子 可愛かったね、あの頃は。

清 男になつたんだよ、あいつは。今はちよつと変なもんにかぶれてるかもしれねえが、なんも心配することはねえよ。

悦子 ……そうかねえ？

清 俺が若い頃は日本は戦争一色だよ。軍隊で終戦を迎えて復員したらしたで、食うために親父や武さんと一緒になって汗みずくで働いてよ。後ろを振り向いて物を考える余裕なんてまるでなかった。やつと上向いてきたつて思えるようになった時にや、もう蚊帳はだんだん売れなくなつちまつた。でもまあ、仕方ねえこつた、それが時代つてやつなんだろうな。

悦子 あんたよくやつてきたよ。

清 ありがとよ。でも修三は違う。あいつあ貧乏な生まれだが、てめえの力で稼いで、一生懸命勉強して、一生懸命一生懸命金を貯めて、そんでやつとこ大学まで進んだんだ。もちろん、あいつ自身頑張ったことは間違いないねえ。俺たちはずっとそれを見てきた。うん。修ちゃんは頑張ったよ。それはよく知ってる。

悦子 だけど、その頑張りを許される時代を生きてるつてことでもあるんだ。羨ましいじゃねえか。俺たちには許されなかったことだもんな。

悦子 ……そうだね。でも、修ちゃんの頑張りを無駄にしなかったのは時代なんてぼやつとしたもんじゃない。あんただよ。あんたがあの子の力になつたから今があるんじゃないか。

清 おめえもだろ。

悦子 そうだね。私らだね。

清 おめえは笑うかもしれねえし、怒るかもしれねえ。でも俺はよ、この十年、あいつの力になれて良かったって思ってるんだ。工場は守れなかったし、勉や武さんにや割り食わすことになっちまったけど、このことだけは良くやったって自分で思ってるんだ。

悦子 笑うわけないじゃないか。

清 確かに修三は他人だよ。でもよ、この十年を一緒に過ごして、あいつはうちで一丁前になった。俺はそのことが嬉しいんだ。

悦子 あんたらしいよ。

清 あいつあ俺らから離れてももう大丈夫だ。

悦子 ・・・じゃあ修ちゃんも東京に残って何するの？仕事がなきゃ大学は続けられないでしょ？

清 情けねえ話だが、松尾さんにもう相談してるんだ。夜学に通いながら勤められるところ探してくれてるはずだ。

悦子 そんな都合よく見つかるの？

清 大丈夫だろう。あの人はあれでなかなかのやり手らしいからな。

悦子 それなら大丈夫なのかねえ・・・

清 大丈夫さ。あいつならどこ行っただってやっていける。

悦子 ・・・なんだか少し寂しいけどねえ。

清 仕方ねえだろ。人になんかしてやるってのはそういうことだ。見返りなんか欲しがっちゃいけねえんだよ。

間

悦子 ねえ、私から言う分にはかまわないでしょ？

清 何をだよ？

悦子 宇都宮についてこいって。

清 おめえ・・・

悦子 私はやっぱり言っておきたいよ。修ちゃんが他人だとしても、親心つてのはそう簡単には捨てられるもんじゃない。

清 ・・・

悦子 ちゃんと選んでもらったうえで、私らと来ないってんならそれは諦めがつく。でも何も言わずハイさよならなんて寂しすぎるよ。

清 ・・・

悦子 それにさ、ちゃんと言っておかないと、あの子、私らに捨てられたって思っちゃうか

もしれないじゃない。でも多分あの子はそう思っても一言も言わないよ。ぐっと飲み

込んじやう。そんなの可愛そうじゃない・・・

清 あいつは賢い奴だ。分かってくれるはずだ。

悦子 ……お願い、せめて私から言わせて。ね？

間

清 好きにしるよ。

悦子 ありがとう。

清 俺だって別にあいつが憎いわけでもねえし、邪魔だと思ってるわけでもねえ。

悦子 そんなこと分かってるよ。

清 付いてきてえって言うなら、断る理由はねえよ。

悦子 うん、そうだね。

修三の声 ただいま戻りました。

二人、顔を見合わせる。

清 修三、悪いけどちよつとこつち来てくれー。

沈黙。修三、堅い表情で登場。

悦子 お帰り、修ちゃん。

修三 ただいま戻りました。

清 帰ってきたなり悪いんだが、まあちよつと座ってくれ。

修三 はい。

修三、座り、うつむく。沈黙。清が口を開く。

清 この前の話の続きだ。おめえ、この先どうするか考えたか？

修三 ……

清 どうだ？

修三 (顔を上げて何か言いたそうにするが言わない)

清 どうした？

修三 ……分かりません。

清 考えておけて言っただろう？

修三 すいません。

清 俺はよ、おめえはどっか新しい勤め先をみつけて何とか働きながら大学を卒業した方が良いと思ってる。せつかく苦労して入学したんだ。おめえだって卒業してえだろ？

修三 ……あの。

清 なんだ？

修三 お二人はどうするんですか？

清 俺たち？

悦子 私らはね、私の実家のある宇都宮に行こうと思ってるのよ。

修三 宇都宮……

悦子 兄がね、今あつちで牛乳屋やってるの。人手が足りないっていうから丁度いいってことだね。

修三 ……そうですか。(うつむく)

悦子 それでね、修ちゃん。もし良かったらあなたもついてこない？

修三 え？

悦子 気心の知れた信頼できる人なら、連れて来てもかまわないって、兄は言ってくれてるの。修ちゃんだったら安心して推薦できる。

修三 ……

悦子 最近、新しくできた高校の購買の飲料販売の契約が取れたんですって。だから仕事はいくらでもあるし、それなりにちゃんとお給料も払えるのよ。

修三 ……

悦子 あつちに行くってことになったら、大学にこのまま通うってのは難しくなっちゃうけど……

修三 そうですね……

清 俺としちゃ、おめえには大学を出てもらいてえ。だから俺たちには気兼ねすることはねえ。好きなようにしろ。

修三 ……はい。

清 もちろんこつちに残るんだったら、おめえの身の振り方は考える。今、松尾さんに協力してもらって、夜学に通いながら住み込みで働けるようなところ探してるんだ。それなら今と変わらず大学は続けられるだろう？

修三 ……

清 それで、おめえはどうしたいんだ？

悦子 好きに選んで、修ちゃん。どうしたい？

長い間

清 修三、どうした？

修三 ……僕、どうしたらいいのか。

清 馬鹿野郎、男だろう。シヤキツとしろよ、シヤキツとよお。

悦子 あなたが自分で決めていいのよ。

修三、苦し気に顔を歪めて黙りこむが、やがておずおずと口を開く。

修三 僕は大学を続けたいです。あそこには僕のやらなきゃいけないことがあります。

清 分かったよ、修三。な、これでいいな？

悦子 ……うん。分かったよ。

清 これでいいんだ。何とかこつちで大学に通えるように段取りしてやる。

修三 ……清さん、悦子さん……ごめんなさい。

清 馬鹿野郎、だから謝る奴がいるかってんだ。

修三 はい……ありがとうございます……

清 ああ。それでいいんだ。

悦子 修ちゃん、頑張ってね。

清 これでお別れってわけじゃねえよ。(立ち上がる) さて、明日からは小林蚊帳のあと始末だな。おめえにも手伝ってもらおうぞ。

修三 はい……

清 そんなら今日はもう遅い、さっさと寝ちまえ。(出ていく)

悦子 じゃあおやすみ。(清に続く)

修三 おやすみなさい。

清、悦子、退場。修三、しばらく座り込んでいるがやがてとぼとぼと退場。転換。それから一か月後の昼間。勉がぼーっと座っている。そこに背広姿の茨木も登場。ふらっと入ってくる。

茨木 よお。

勉 あれ？実さん。

茨木 久しぶりじゃねえか。北海道じゃなかったっけ？

勉 ちよつと向こうもひと段落着いたからね。それにしても実さん、相変わらず羽振り良さそうだね。サラリーマンみたいな恰好しちゃって。

茨木 みたいじゃなくてサラリーマンなんだよ俺は。

勉 で、そのサラリーマンさんが何しに？

茨木 いや、ちよつとな……。当分こつちにいるのか？

勉 来週にはまた北海道だよ。今度は女房子供も連れてくんだ。

茨木 そりゃ良かったじゃねえか。

勉 現場暮らしたから毎日家に帰れるわけじゃねえけど、これで週に一回は子供の顔が見れるよ。

茨木 ガキが可愛いなんて小さいうちだけだぜ。せいぜい可愛がってやれよ。

勉 言われなくってもそうするよ。

茨木 おめえは北海道で兄貴は宇都宮か。なかなか会えなくなるな。

勉 仕方ねえよ、仕事なんだから。生きてりゃいくらでも会う機会あるよ。

茨木 それもそうかもな。で、来週からってことは今日は清に会いに来たんだろ？

勉 まあね。

茨木 それなのに一人で何してるんだ？

勉 じつは今日さ、修三が出ていくんだよ。

茨木 ああ、そうなのか。

勉 兄貴が松尾さんに頼み込んで、新しい会社見つけてもらったんだ。

茨木 面倒見のいいこった。

勉 そこまでしなくてもいいのによ。

茨木 まあそう言うなよ。清はそういう奴だ。

勉 まあねえ。正直、俺は別れを惜しむ気持ちにもなれねえよ。それに俺みたいなのが輪の中にいるのも場違いな気がするんだ。

茨木 家族なんだから別にいいんじゃないか？

勉 なんかそうも思えなくてさ。

茨木 ふうん、つい何年前か前まではお前もその輪の中にいたのにな。

勉 それはそっちだっけそうでしょ？しょっちゅう入り浸ってたくせに。

茨木 懐かしい話だな。

間

茨木 俺さあ、今日は仕事で来てるんだよ。

勉 仕事？

茨木 ここの地主の安藤さん、うちの会社通してここアパートにするんだ。

勉 それで実さんが？

茨木 そう。お前んちの傍だろって、押し付けられちゃった。

勉 そりゃ災難だね。

茨木 ま、仕事だからよ。

勉 安藤ってあの爺さん？

茨木 今はその息子さんだ。アパート経営の方が儲かるってほくほく顔だよ。

勉 ここがアパートにねえ・・・

茨木 だからちよっと悪いけど、兄貴呼んできてくんねえか？

勉 分かった。(立ち上がり) そろそろ帰ろうかと思ってたんだ。ついでに声掛けるよ。
茨木 え？帰るのか？清と話してかなくていいのか？
勉 別にいいんだ。特に用があるわけでもなし。じゃあまた。
茨木 ああ、またな。

勉、退場。しばらくして清、登場。

茨木 おう、取り込み中すまねえな。

清 別にいいけど。仕事ってなんだよ？

茨木 知ってるだろ？ここよお、安藤さんがうちの会社を通してアパートにするんだと。

清 ああ、らしいな。聞いたよ。

茨木 解体の業者決まったから、いつ引き払うのか聞いてこいって言われてんだ。

清 ……そうか。

茨木 分かる範囲でいいから予定教えてくれねえか？

清 ……

茨木 大体でいいんだ。多少予定前後するのは仕方ねえからよ。

清 家財道具はともかく工場の機械や道具はちよつと片付けるのに時間かかるんだ。一応、あと半月とは思ってる。

茨木 分かった、二週間だな。じゃあこっちは一応それを目安にさせてもらうな。

清 ああ、そうしてくれ。

茨木 細かい日程決まったら、俺でもいいし、安藤さんに直接でもいいから連絡してくれや。

清 分かった。

茨木 邪魔して悪かったな。(行こうとする)

清 実。

茨木 うん？

清 なんかすまねえな、しりぬぐいみてえな仕事させちまって。

茨木 別におめえのせいじゃねえだろ？

清 俺あ不甲斐ない三代目だったよ。

茨木 誰がやってもこうなってたよ。…それに今はこれが俺の仕事だから。

清 ……ああ。

茨木 そんなじゃあな。

清 ああ、またいつか勝負しようぜ。(将棋の手ぶり)

茨木 機会があったらな。

茨木、退場。清、工場を見回しそつとつぶやく。

清　父ちゃん、祖父ちゃん、勘弁してくれよ。

悦子、松尾、修三、登場。

悦子　あんた、松尾さんがそろそろ。

清　もう時間ですか？すみません。

松尾　こちらこそ、急かしてしまって申し訳ありません。

悦子　あちらの社長さん、午後から出る用があるから、昼前には着きたいんですって。

松尾　そういうわけですので、そろそろ・・・

清　松尾さん。(正座して姿勢を正す)　修三、おめえも座れ。

悦子、清の隣に座る。修三、少しためらうが悦子に倣う。松尾も仕方なく清と対面して座る。

清　こいつのこと、よろしくお願いします。(頭を下げる)

悦子　(同じく頭を下げる)

清　修三。

修三　(優れぬ表情ながら黙って頭を下げる)

松尾　ご安心ください、先方の社長さんも良い方です。大学を出るまでは店に住み込みでかまわないって言うてくださってます。

清　松尾さんには最後の最後まで、お世話になりっぱなしで。ありがとうございます。

松尾　最後にお役に立てることがあって良かったです。

悦子　先方の社長さんにくれぐれもよろしくお伝えください。お願いします。

松尾　必ず伝えます。

清　修三、しっかりやれよ。頭をいっぱい下げて仕事を仕込んでもらえ。

修三　・・・・・・・・

清　学生運動するなどは言わねえが、節度は守れよ。いいな？

修三　・・・・・・・・

松尾　そのへんもこだわらない社長さんです。仕事さえちゃんとやってくればと仰ってましたよ。

修三　清さん、悦子さん、今までありがとうございました。(暗い顔のまま頭を下げる)

清　卒業まで面倒見てやれなくて悪かったな。

修三　・・・・・・・・

清　馬鹿野郎、なんて顔だよ。笑え。

修三　・・・・・・・・(笑えない)

松尾　飯田君、じゃあ行こうか。

松尾、一礼して退場。修三、とぼとぼとついていこうとする。

悦子（思わず立ち上がり）修ちゃん！

修三（立ち止まる）

悦子 覚えてて、これで私らと縁が切れるわけじゃないんだよ。もし、もしもだよ。誰に頼っていいか分からない。そういうことがあったら、遠慮なんかしないで会いにおいで。絶対に味方になってあげるから。

修三
.....

清 おめえなら大丈夫だ。俺あ心配してねえよ。

修三（不器用に一礼する）

清 早く行けよ、馬鹿野郎。松尾さんを待たせるな。

修三、退場。清、悦子、

年老いた修三の声 まことに勝手な話だが、この時私は、親に捨てられたにも等しい悲しみを感じたことを告白しなければならぬ。付いていけないことを選んだのは私自身だったというのに、私はあの時捨てられたと思った。その悲しみは私の心を意固地にさせた。私はその後、あの懐かしい人々とは一度もあい見えることのない人生を選んだ。その理由を突き詰めると、あの日感じた悲しみに立ちかえる。

あの頃、私があの人々と共にあった時代。あれからすでに半世紀近い時間が流れ、既に私以外の人々は鬼籍に入っていることだろう。この私が生きる2017年の今は、あの頃の私達の想像した輝かしい未来なのだろうか。経済成長しつくし、便利なものにあふれている今という時代。しかし、うわべを一枚めくれば不安、不信、そして孤独がたちまち顔をのぞかせる。六年前に私の故郷福島を襲った不幸な天災と事故は、否応なく私にそのことを意識させる。これは時の流れの必然で、良し悪しを論ずることではないのかもしれない。それならそれでもかまわない。私はただひたすらに、あの頃を懐かしむ。ただそれだけである。目を瞑れば、あの懐かしい声がすぐに聞こえてくるような気がする。あの人はまだ私を叱ってくれるだろうか。「馬鹿野郎」と言ってくれるだろうか。あの言葉の裏にどれだけの善意が詰まっていたことか。そのことを思うと、この年老いた臉にも涙が甦るのである。

オープニングの続き。読み手は高田に代わっている。

高田 あれだけ私の心を捉えて放さなかったあの当時の運動は二年後、あの山荘の一連の事件によって終息した。大学をなんとか卒業した私は小さな会社の営業として大過のない職業人生を全うした。三十手前で一度、お互いに不幸だった結婚をした後はずっと一人きりであった。三年後に、また東京オリンピックが開催されるそうさ。何年も前から、テレビやラジオから東京オリンピックという言葉が聞かれるようになった。それが2020年のオリンピックのことを指していると分かりながら、私の頭はどうしても1964年を思い出してしまふ。そしてあの工場で過ごした十年間を思い出してひたすら反芻してしまふ。あの十年は、私が生きた他のどの時間よりも忘れがたい時間だったのだ。私はようやく、このとりとめのない独り言のような文章を書き終える決心をした。もう一度、このノートを見つけてくれた方にお礼とお詫びを伝えたい。私は一人である。

長い間

村上 お疲れ様でした。

高田 いや、そちらこそ。

村上 蚊帳って見たことありますか？

高田 いや、私は東京生まれなんで。

村上 私もです。

高田の携帯が鳴る。高田、電話を取り出し出る。

高田 もしもし。……はい、まだ現場です。……はい、それらしきものは一応。……はい？……そういうことですか。(手に持っているノートを見る)……はい。そういうことならすぐに署へ。……はい。……分かりました、失礼します。(切る)

村上 どうかしましたか？

高田 ああ、なんていいましたっけこの大家さん。

村上 安藤さんですか？

高田 その安藤さんが署まで人を連れてきたそうです。線香を上げたい。それと、もし遺書があるなら内容だけでも教えてほしいって。

村上 誰ですか？

高田 ……豊鑠(かくしゃく)としているけど、九十近いお婆さんだそうです。

村上 もしかして……(ノートを見る)

高田 はい。そういうことです。

村上 ご存命だったんですね。でもどうしてこんなに早くに分かったんでしょう？

高田 ここなんですよ。

村上 え？

高田 蚊帳工場があった場所。そして地主はずっと同じ。

村上 じゃあ大家の縁で住んでる場所は分かってた。あ、でも一度も会わなかったって書いてましたよね？じゃあ交流はなかったんですかね。

高田 それは聞いてみないと分かりませんね。

村上 ……

高田 どうかしましたか？

村上 それにしたって…

高田 ？

村上 一人きりなんて思い込むことなかったのに。

高田 それを考えるのは我々の仕事じゃないですよ。…気持ちは分かりますが。

村上 そうですね…

高田 それじゃあ、私はこれを持って署に戻ります。

村上 はい。

二人、退場。工場の照明に戻る。清、登場。少しイライラした様子で何かを待っている。

修三の声 ただいま戻りましたー。

清 (がばっと立ち上がって) おーい、こっちだ、早く来い！

修三、急いだ様子で登場。

清 どうだった？

修三 はい、合格です。

清 やったじゃねえか！(修三の背中をどんと叩く)

修三 ありがとうございます！

清 いや、俺は大丈夫だと思ってたけどよ。(母屋に向かって) おーい、おーい！悦子にも言ったか？

修三 いや、家の方にはいなかったの。

清 何やってんだよ、あいつは。おーい！

修三 (改まって) 清さん。

清 なんだよ？

修三 僕、こっち出てくるまでは進学できるなんて本当に思ってもみませんでした。それが

大学にまで行けるなんて。本当に、本当に、ありがとうございます！

清 馬鹿野郎、全部てめえの力じゃねえか。

会話の中、段々暗転していく。

修三 そんなことないです。

清 入学金だっけてめえで貯めたんだ。おめえは胸張って大学通えばいいんだよ。

修三 ……僕、勉強も仕事も今まで以上に頑張ります。

清 当たり前だ馬鹿野郎。半端なことしやがったら承知しねえからな。

修三 はい！

他の登場人物たちも全員、喜びの表情で飛び込んでくる。全員が修三を祝福する。音楽が大きくなる、喜びの会話をかき消す。やがて暗転。

終